



後口山遺跡発掘調査報告書

平成 9 年度

倉吉市教育委員会

うしろやま

後口山遺跡発掘調査報告書



遺跡略号 20S U

平成 9 年度

倉吉市教育委員会

<10>0100572734

序

この報告書は、鳥取県倉吉地方農林振興局が実施する県営東伯中央地区広域農道事業に伴う事前調査として、平成9年度に鳥取県倉吉市桜字後口山において行った後口山遺跡発掘調査の記録です。後口山遺跡が所在する桜地区には、平安時代後期に創建され、日本最古の延久3年銘を有する瓦絆や、重要文化財木造阿弥陀如来坐像が所在する大日寺があることで知られており、極楽の峰五輪塔群、頼朝墓など大日寺に関連する遺跡があります。

調査の結果、大日寺に関連する遺物・遺構は発見されませんでしたが、当地では数少ない縄文時代と推定される落し穴、炉跡、土壙を、縄文土器、敲石、磨石などの石器と共に確認しました。これにより、私たちの祖先が木の実を調理したり、動物を捕らえていたことが分かりました。

この報告書が多くの方々に活用され、文化財への理解を深めていただければ幸いに思います。

最後に、今回の調査にあたり、ご協力いただきました鳥取県倉吉地方農林振興局、桜地区関係者、現場作業や内務整理に従事していただいた方々をはじめ、関係各位に対し、深く感謝の意を表すものです。

平成10年3月

倉吉市教育委員会

教育長 足羽一昭

例 言

1. 本報告書は平成9年度に倉吉市教育委員会が、県営東伯中央地区広域農道事業に伴う事前調査として、鳥取県倉吉市桜字後口山において実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2. 発掘調査団は次のような組織・編成である。

団 長 足羽 一昭（倉吉市教育委員会教育長）

調査委員 名越 勉（倉吉市文化財保護審議会会長）

手嶋 義之（倉吉市文化財保護審議会委員）

調査員 根鈴 輝雄（倉吉博物館学芸員） 真田 広幸（文化課課長補佐兼文化財係係長）

森下 哲哉（文化財係主任） 根鈴智津子（文化財係主事）

加藤 誠司（文化財係主事） 岡本 智則（文化財係主事）

岡平 拓也（文化財係主事）

調査補助員 山根 雅美・松田 恵子

事務局 石田佐喜子（教育次長 9月まで） 新田 征男（教育次長 10月から）

生田 敦美（文化課課長） 福澤 昌子（文化財係主事）

山崎慎之介（文化財係主事） 金田 朋子（臨時職員）

内務整理 泉 美智子・世浪由美子・妻藤 君江・松鶴あつ子・竹歳 晚子・山崎有香子

3. 現場での調査は加藤が担当し、山根が補佐した。遺構の面図整理は加藤・松田・妻藤が担当した。遺物実測・拓本・遺物写真は、加藤・森下・根鈴智・岡平が担当し、松鶴・竹歳・山崎が補佐した。浄書は、泉・世浪・妻藤が担当した。

4. 石器の石材の観察方法および産地は、岡山理科大学自然科学研究所蒜山分室主任技術員 白石 純氏にご教示を賜った。記して謝意を表するものです。

5. 第Ⅳ章は、炭化材の年代測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

6. 本書の執筆は、第Ⅲ章2 遺物の縄文土器を森下が、それ以外を加藤が担当した。編集は松田・世浪が担当した。

7. 第1図（地形図）は、建設省国土地理院発行の1:50,000地形図「倉吉」「大山」の一部を複製・加筆したものである。第2図は、平成9年修正測量の1:2,500国土基本図 倉吉市平面図を使用した。

8. 掘図中の方位は、国土座標第V座標系の北を示す。

9. 遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一している。

10. 調査によって得られた資料は、倉吉博物館に保管している。

本文目次

I	発掘調査に至る経過	1
II	位置と歴史的環境	1
III	調査の概要	2
1	遺構	4
2	遺物	14
IV	鑑定	23
V	まとめ	25
報告書抄録		

挿図目次

第1図	倉吉市周辺の地形と遺跡分布図	3
第2図	後口山遺跡調査区位置図	4
第3図	後口山遺跡遺構全体図	5
第4図	1号～8号土壙遺構図	7
第5図	9号～12号土壙遺構図	8
第6図	1号～7号落し穴遺構図	9
第7図	13号～19号土壙遺構図	10
第8図	1号溝状遺構・1号道状遺構遺構図	12
第9図	1区遺物出土位置図	13
第10図	縄文土器遺物図1	15
第11図	縄文土器遺物図2	16
第12図	土師器・土師質土器遺物図	17
第13図	敲石・磨石・石錘・砥石・石刃遺物図	19
第14図	磨石兼敲石、石皿・台石遺物図	21

図版目次

図版1	遺跡 1区調査前全景 1区調査後全景	
図版2	遺構 1号土壙 2号土壙 3号土壙 4号土壙 5号土壙 6号土壙 7号土壙 8号土壙 9号土壙	
図版3	遺構 10号土壙 11号土壙 12号土壙 1号溝状遺構 5号土壙西側縄文土器出土状況	
図版4	遺跡 2区調査前全景 2区調査後全景	
図版5	遺構 1号落し穴 2号落し穴 3号落し穴 4号落し穴 5号落し穴 6号落し穴 7号落し穴	
図版6	遺構 13号土壙 14号・15号土壙 16号土壙 17号土壙 18号土壙 19号土壙 1号道状遺構	
図版7	遺物 縄文土器	
図版8	遺物 縄文土器・土師器・土師質土器	
図版9	遺物 石器類	
図版10	鑑定 炭化材の顕微鏡写真	

I 発掘調査に至る経過

平成7年3月、桜地区の北側丘陵で、県営東伯中央地区広域農道事業の計画が鳥取県倉吉地方農林振興局から提示され、倉吉市教育委員会に埋蔵文化財の有無の照会があった。当該地の周辺は、大日寺遺跡群の存在が知られており、大日寺上院の一部と推定される極楽の峰五輪塔群や、頼朝墓と呼ばれる五輪塔群が存在するため、当該地でも遺跡の存在が想定された。倉吉市教育委員会は、遺跡の有無とその範囲を確定するため、平成8年9月～10月にトレンチによる試掘調査を行った。その結果、ほぼ全てのトレンチで、土器、焼石、磨石、散石などの遺物が出土し、第1・7トレンチの2箇所で土壤を確認した。倉吉市教育委員会は、鳥取県倉吉地方農林振興局と協議を行い、遺跡の存在する第1トレンチ部分の1,000m³、第7トレンチ部分の1,900m³、合わせて2,900m³について発掘調査を実施することになった。発掘調査は、倉吉市教育委員会が鳥取県倉吉地方農林振興局の委託を受け、現地調査を平成9年4月30日から同年8月28日まで行った。

註 加藤誠司「桜後口山地区（後口山遺跡）」「倉吉市内遺跡分布調査報告書」倉吉市教育委員会 1997

II 位置と歴史的環境

後口山遺跡は、倉吉市街地から約12km西に離れた倉吉市桜字後口山に所在し、東伯郡大栄町と隣接している。遺跡は、大山の火山活動により形成された通称久米ヶ原丘陵の基部で、南西から北東方向に延びる丘陵の尾根上に位置し、標高は約200～220m、水田面からの比高差が約60mである。以下、周辺の遺跡を分布図（第1図）範囲内の遺跡を中心に述べる。

縄文時代の遺跡は、早期から晩期まで存在し、市内で20余りの遺跡が確認されている。住居跡については、鳥取県中部地方（倉吉市・東伯郡）で4遺跡、7棟見つかっている。取木遺跡（18）は、前期の焼石群と竪穴式住居跡と平地式住居跡が各1棟確認されている。東伯町・森藤第2遺跡（3）は、後期の竪穴式住居跡が2棟、津田峰遺跡（65）は、後期の竪穴式住居跡が1棟確認されている。大栄町・西高尾谷奥遺跡（2）は、黒曜石の剥片と共に、不明瞭ながら住居跡が2棟確認されている。その他の主な遺跡としては、北条町・島遺跡は、前期から晩期に至る低湿地の遺跡で土器、石器、丸木舟、動物の骨など多くの遺物が出土している。近年、丘陵全体を大規模に調査する数が増えるにつれ、落し穴を多く確認している。中尾遺跡の84基をはじめとして、長谷遺跡57基、横谷遺跡群（84）47基などである。晩期の遺跡としては、配石遺構と甕棺墓を確認した松ヶ坪遺跡がある。

弥生時代は、久米ヶ原丘陵を中心に多くの集落跡がある。その多くが後期の集落で、古墳時代も引き続いて営まれる。後口山遺跡に近い所では、服部遺跡群（41）で弥生時代後期から古墳時代にかけて10棟の竪穴式住居跡が確認されている。

古墳時代には、丘陵上に多くの古墳が造られるようになる。古墳時代前期の首長墓は、粘土被を主体として、礫瓢鏡の出土した国分寺古墳（前方後方墳・全長60m）、竪穴式石室を主体とした宮ノ峰19・21号墳（方墳）、三角縁神獸鏡・琴柱形石製品の出土した、上神大将塚古墳（円墳・径30m）がある。後期になると桜地区の周辺でも古墳が造られるようになる。服部古墳群は約60基の古墳が確認され、このうち7基の調査が行われている。調査された古墳は、いずれも直径十数mの円墳である。服部36号墳は、偏平な板石を壁に用いた竪穴式石室を主体に持っていた。また、桜地区でもその数は少ないながら、丘陵の山裾に竪穴式石室が数基露出している。

奈良時代になると、久米ヶ原丘陵東端部周辺に、伯耆国衙・伯耆国分寺・伯耆国分尼寺が近接して設けられ、

伯耆国の中心地となる。不入岡遺跡は、物資収納施設とみられる掘立柱建物群が見つかっている。その他寺院跡として、佐波理匙が出土した大御堂廃寺、大原廃寺、石塚廃寺がある。

平安時代になると、桜地内に大日寺が創建される。大日寺は、承和 8 年（841）円仁の創建であるとも、永延 2 年（988）創建であるとも伝えられる天台宗の寺院である。現在は小さな寺院だが、往時には広大な寺域を持ち、上院、中院、安養院の 3 院から成り 300 余りの坊舎があったと『伯耆民談記』^(注1) に伝えられる。これらの院の所在地をあてはめると、大イチョウのある字円地坊付近が上院、平成 4 年のは場整備に伴う発掘調査で建物跡の一部や階段、道路が見つかっている字山ヶ市付近が中院、現在の大日寺付近が安養院と推定される。

大日寺には多くの五輪塔群が残る。字山ヶ市の山中に、頼朝墓と呼ばれる大型五輪塔を含む五輪塔群、大イチョウ付近の五輪塔群、大イチョウから山中に入った所に、大型の五輪塔群が並ぶ極楽の峰五輪塔群がある。大イチョウから極楽の峰五輪塔群に向かう途中の経塚から、延久 3 年（1071）の紀年銘を持つ瓦経が発見されている。仏像としては、嘉祥 2 年（1226）の銘がある木造阿弥陀如来坐像をはじめ、木造十一面觀音菩薩立像、木造薬師如来像、石像大日如來坐像など平安時代の仏像が残る。その他に、現在鳥取県の鶴淵寺所蔵になっている梵鐘は「伯耆州桜山大日寺上院之鐘・・・後略・・・」と銘が残り、寿永 2 年（1183）に改鑄されている。

註（1） 佐伯元吉編 「伯耆民談記」「因伯耆書」第 2 冊所収 名著出版 1972

（2） 森下哲哉 「大日寺遺跡群発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1993

参考文献 「新編 倉吉市史第一巻 古代編」 倉吉市 1996

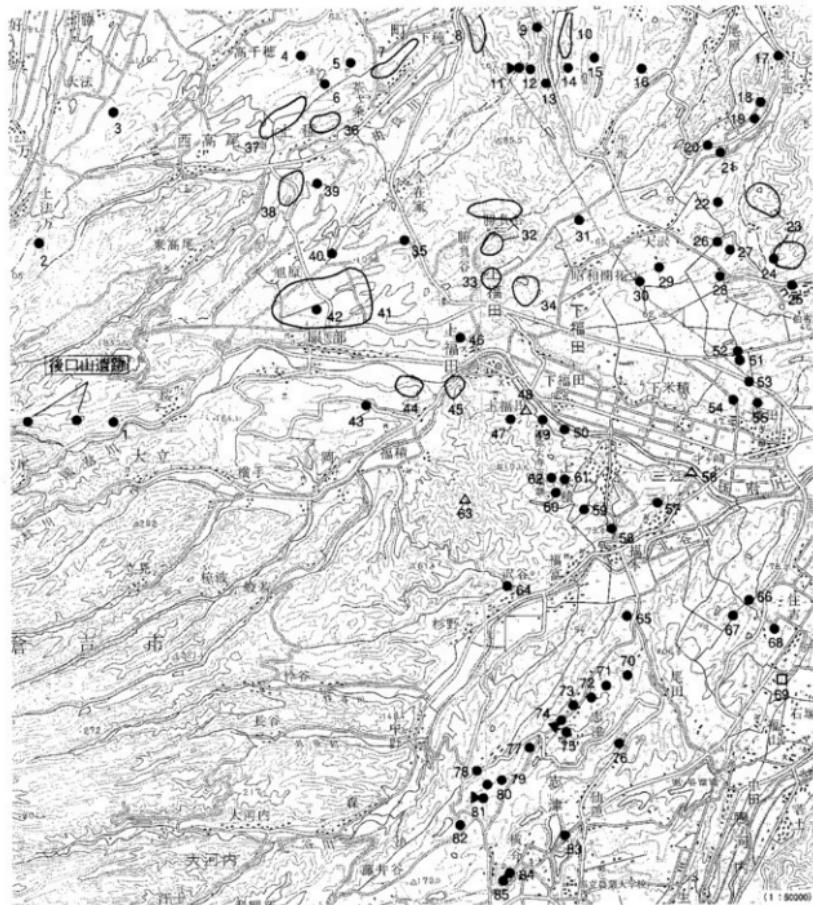
III 調査の概要

発掘調査は予備調査の結果、遺構を確認した 2 箇所について、西側調査区を 1 区、東側調査区を 2 区と名付けを行った。樹木の伐採後、1 区についてはすべて人力で、表土の除去・遺構検出・掘り下げを行った。2 区は、重機によって表土を除去後に人力で調査を行った。

調査地の基本層序は、1 区と 2 区で異なる。1 区は黒褐色土（クロボク）の堆積が全く無く、上層から I 表土（腐葉土）・II 黒褐色土（ソフトローム）である。遺構検出は、ソフトローム上面で行った。表土から遺構検出面までの深さは約 20cm 弱と浅い。2 区の基本層序は、I 表土（腐葉土）・II 黑褐色土（クロボク）・III 黒褐色土（ソフトローム）・IV 黄灰色砂質土（ホーキ火山砂層）である。遺構検出は、調査区の西半分では III 黒褐色土（ソフトローム）上面で行ったが、褐色土の遺存状態の悪い東半分は、IV 黄灰色砂質土（ホーキ火山砂層）で行った。表土から遺構検出面までの深さは約 50cm である。

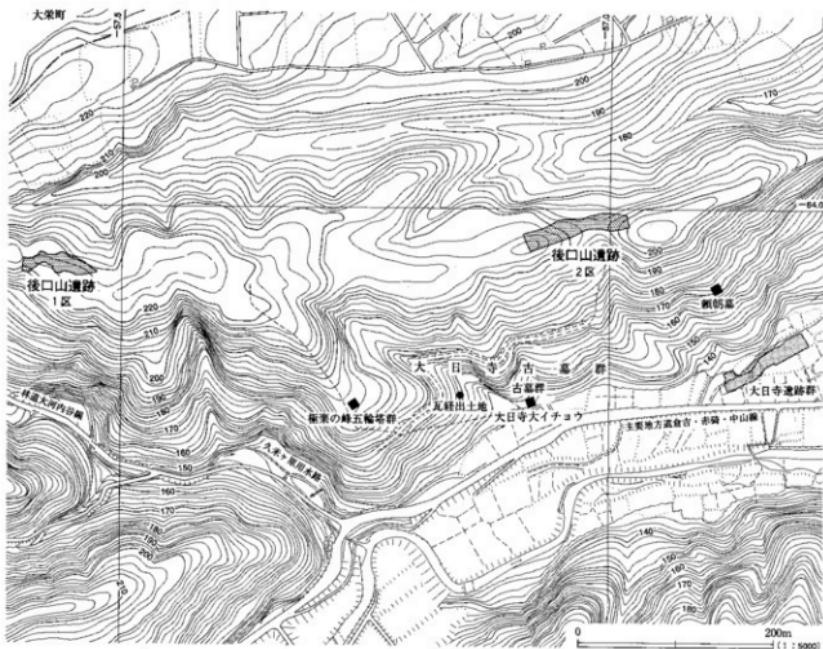
1 区の遺物包含層は、I 表土（腐葉土）・II 黑褐色土（ソフトローム）、2 区の遺物包含層は、I 表土（腐葉土）・II 黑褐色土（クロボク）である。発掘調査面積は、1 区 = 1,000m²、2 区 = 1,900m² で、合計 2,900m² について行った。

1 大日寺遺跡群	9 清水谷古墳群	17 イキス遺跡	25 向野遺跡	33 ケンカ塚古墳群
2 西高尾谷奥遺跡	10 頸根後谷遺跡	18 取木遺跡	26 遠藤谷峯遺跡	34 離児ヶ墓古墳群
3 森藤第 2 遺跡	11 二タ子塚 6 号墳	19 一反半田遺跡	27 白市遺跡	35 鶏塚古墳群
4 上種第 6 遺跡	12 二タ子塚遺跡	20 コザンコウ遺跡	28 中峯遺跡	36 上種中央古墳群
5 上種第 1 遺跡	13 邦家平古墳群	21 道祖神峰遺跡	29 大沢前遺跡	37 上種西古墳群
6 上種第 5 遺跡	14 東鳥ヶ尾古墳	22 両長谷遺跡	30 大道谷遺跡	38 上種東古墳群
7 上種古墳群	15 大仙峯遺跡	23 古墳群	31 昭和開拓遺跡	39 東峯遺跡
8 下種東古墳群	16 大山遺跡	24 大谷後谷墳丘墓	32 勝負谷遺跡群	40 第塚遺跡



第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

41 服部遺跡群	50 下小垣遺跡	59 後口谷遺跡	68 野畠古墳群	77 家ノ上遺跡
42 服部11号墳	51 東福寺寺遺跡	60 後中尾遺跡	69 石塚魔寺	78 志津向野遺跡
43 牛王野遺跡	52 福田寺遺跡(1次)	61 鷺ヶ平遺跡	70 小鶴物部遺跡	79 野口遺跡(A地区)
44 並塚古墳群	53 岩屋遺跡	62 奥田遺跡	71 大平遺跡(B地区)	80 野口遺跡(B地区)
45 上福田横穴群	54 福田寺遺跡(2次)	63 高城城跡	72 大平遺跡(A地区)	81 野口1号墳
46 観音堂遺跡	55 矢戸遺跡	64 屋敷通遺跡	73 荒神岩遺跡	82 志津八ツ塚古墳群
47 小谷遺跡	56 三江城跡	65 津田峰遺跡	74 塚ノ山古墳	83 仙隱峰遺跡
48 下福田城跡	57 上野遺跡	66 後口1号墳	75 宮ノ前遺跡	84 横谷遺跡群
49 阿弥大寺墳丘墓群	58 福本家ノ上古墓	67 八ツ塚古墳群	76 二子塚遺跡	85 横谷峰遺跡



第2図 後口山遺跡調査区位置図

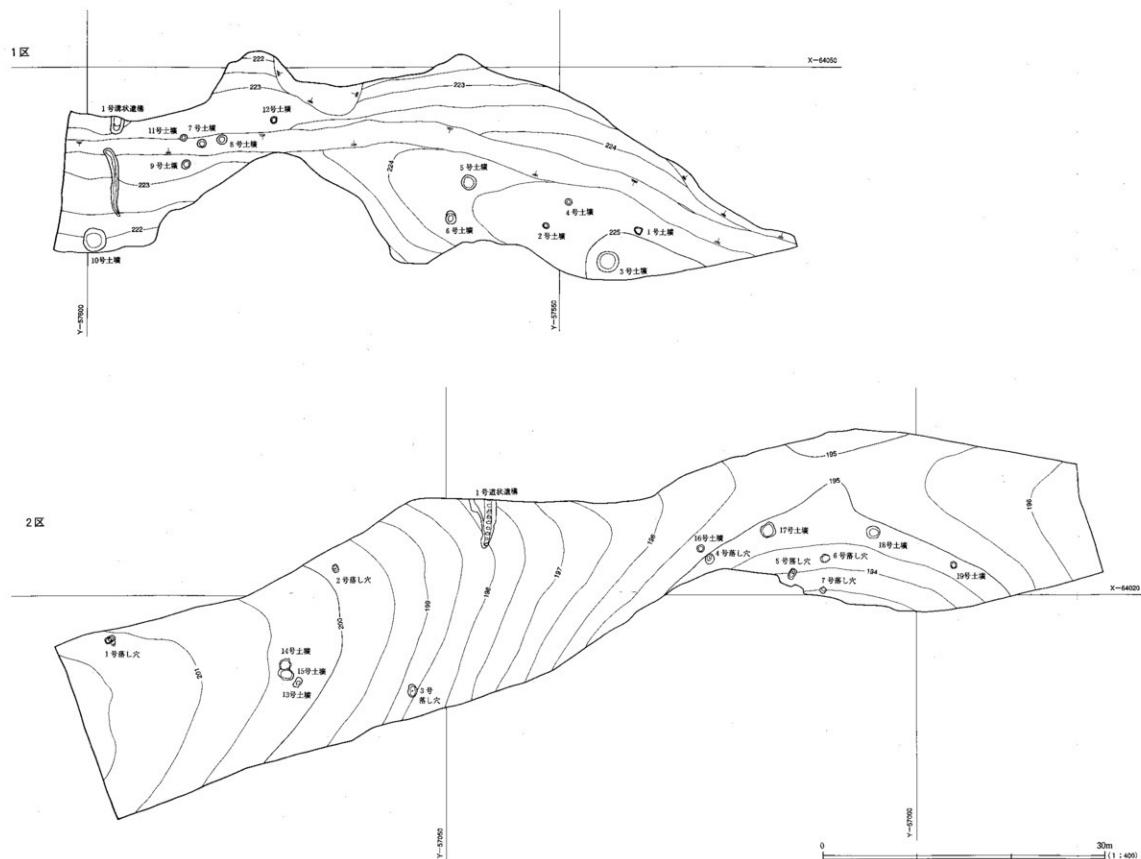
た。遺構の測量は、道路工事用の杭を利用し、国土座標による4mメッシュを組み、 $S = 1/20$ で平面図を実測した。調査後地形測量は、平板を使用し、 $S = 1/100$ で25cm毎の等高線で測量した。

調査の結果、1区で土壙12基・溝状遺構1条、2区で落し穴7基・土壙7基・道状遺構1条を確認した。以下、各遺構の説明は表に一括し、本文では調査方法と立地、特徴を述べる。

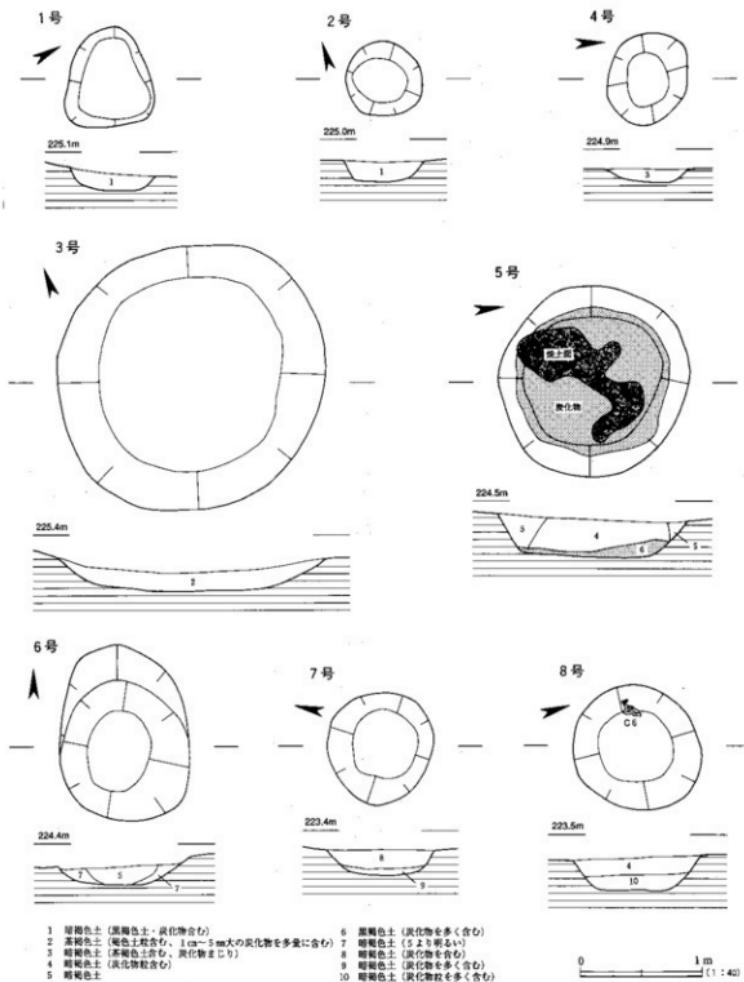
1 遺構

1区

調査区は東西に長く伸びる丘陵の尾根に所在する。調査区には尾根筋に沿って、幅約2mの旧地道が所在する。土壙は、輪郭を確認後、円形の場合は丘陵の斜面に沿って、それ以外は短軸で2分割し、埋土を半分掘り下げた。その後、土層断面の記録を測り、底面まで完掘した。土壙は調査区の東側尾根上と、西側尾根上の2箇所に比較的まとまって合計12基確認した。土壙の平面形は、円あるいは楕円である。断面形は、皿状で底に平坦な面を持つ。規模は3号・10号が直径2m以上であるが、その他は直径1m弱のものが多い。深さは、10数~30cmといずれも浅い。土壙12基のすべてで炭化物が出土した。この内鑑定可能な炭化物は、土壙の年代を判定するため¹⁴C年代測定を行った。3号・10号土壙は埋土中に多量の炭化物を含んでいたが、埋土が柔らかく比較的新しいと推定されたため¹⁴C年代測定を行わなかった。遺物は、5号土壙埋土中から縄文土器の小片が出土したのみである。5号・10号土壙の底面には焼土面があった。

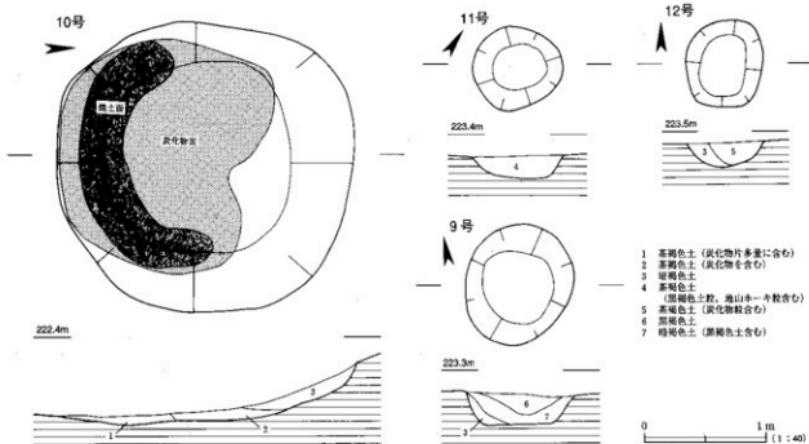


第3図 後口山遺跡遺構全体図



第4図 1号～8号土壤遺構図

1号・2号・4号～6号土壤 調査区東側の尾根筋に所在する。5号・6号は、直径1m以上だが、他は約60～80cmで、深さは20cm弱～30cm弱である。 ^{14}C での年代測定は、1号が(720±70 y.B.P.)、2号が(1200±90 y.B.P.)、5号が(2310±70 y.B.P.)、6号が(1790±70 y.B.P.)と様々である。



第5図 9号～12号土壤構造図

7号～9号・11号・12号土壤 調査区西側の尾根筋に比較的まとまって所在する。規模は直径1m前後、深さ20～30cm前後と類似する。 ^{14}C での年代測定は、7号が(1060±70 y.B.P.)、11号が(1080±60 y.B.P.)と誤差を加味するとほぼ同時期だが、他は8号(1910±70 y.B.P.)、9号(610±70 y.B.P.)とまちまちの結果である。

1号溝状遺構 1区調査区西端に、東西方向の尾根を南北に縱断する形で所在する。溝は尾根頂部で途切れ、北側の溝は調査区外に延びる。尾根の北側溝は断面形が皿状で、長さ(171)・幅(140)・最大深さ48cmである。尾根の南側溝は、断面形が底面に平坦面を持つV字状で、長さ(731)・幅(96)・最大深さ20cmである。溝は、尾根筋に東西に延びる昔の地道部分で途切れる。地境の溝である可能性が考えられる。()内は遺存する規模である。

2区

調査区は東西に長く延びる丘陵の尾根に所在する。

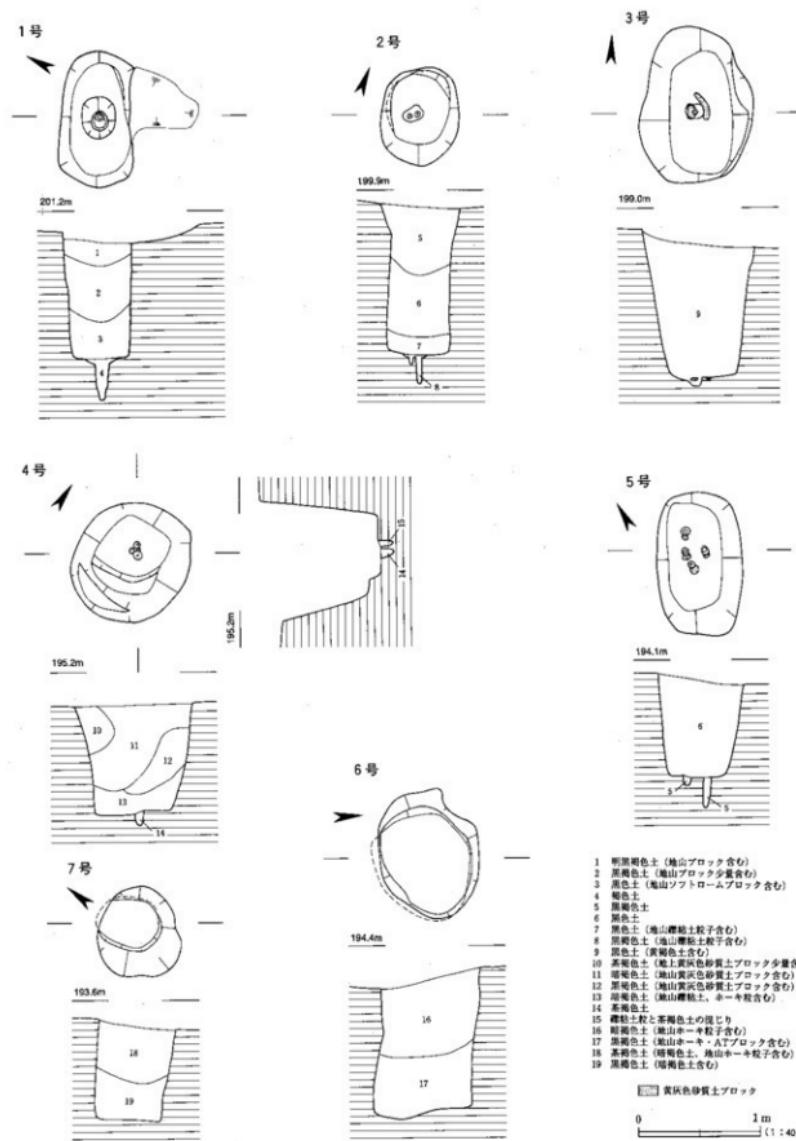
落し穴は、調査区東側、丘陵鞍部をやや下った斜面にまとまって4基、調査区西側尾根筋からややはざれた緩斜面に3基点在し、合計7基確認した。表の項目は、基本的に中尾遺跡⁽¹⁾を踏襲した。調査方法は土壤の輪郭を確認した後、円形の場合は丘陵の斜面に沿って、それ以外は短軸で2分割し、埋土を半分掘り下げた。その後、土層断面の記録を測り、底面まで完掘した。底面に杭穴のある場合は、その土色を確認後に掘り下げた。

1号落し穴 調査区西端の最高所に所在する。底面の杭穴は、3段になっている。浅く楕円形に掘り窓めた中心に杭穴を1つ掘り、杭を1つ打ち込んだものと見られる。

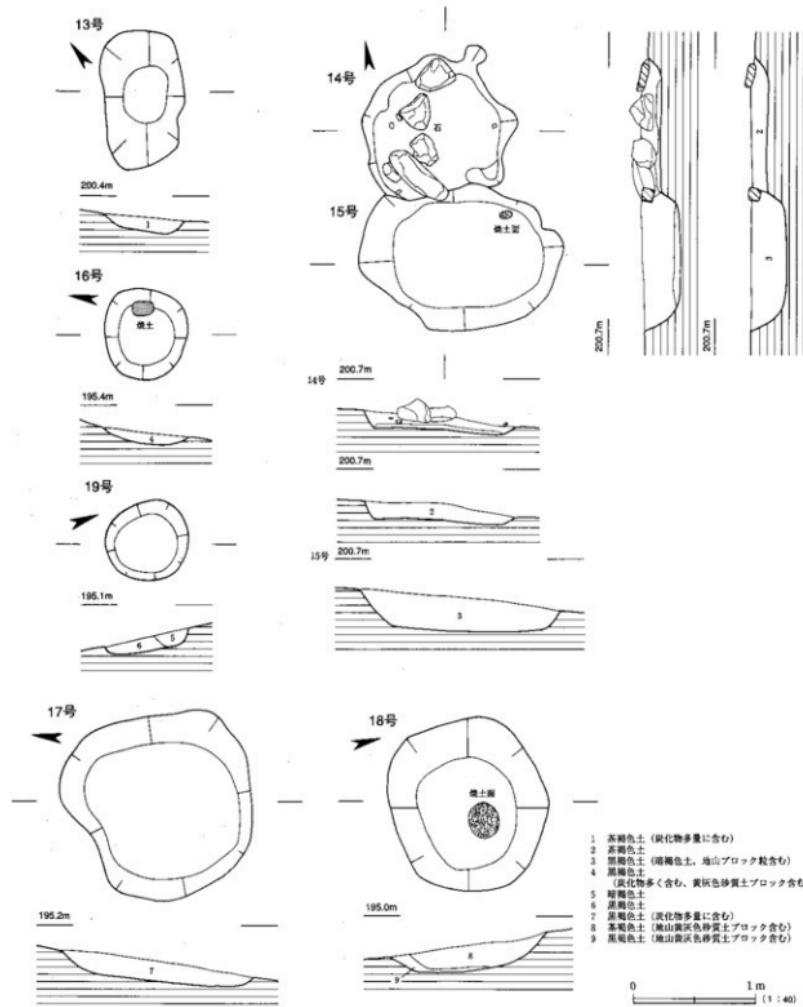
2号落し穴 調査区西側に所在する。底面の杭穴は、2段になっている。浅く楕円形に掘り窓め、杭を2つ打ち込んだものと見られる。

3号落し穴 調査区中央やや西寄りに所在する。底面の杭穴は1つで深さ7cmと浅い。杭穴を検出したレベルで、杭を挟み込む様な状況で、黄灰色砂質土を確認した。

4号落し穴 調査区東寄の南に開く谷の基部に所在する。底面杭穴は2つで、いずれも深さ10cmと浅い。2つの杭穴間でブロック状の黄灰色砂質土が2つ結まっている。



第6図 1号～7号落し穴構造図



第7図 13号～19号土壤構造図

5号落し穴 調査区東寄りで南に開く谷の基部に所在する。底面の杭穴は4つで、その全ての穴には掘り方に沿つて南側から黄灰色砂質土のブロックが詰めてある。

6号・7号落し穴 調査区東寄りで南に開く谷の基部に所在する。これらには、杭穴は確認できなかった。

落し穴一覧表

(cm)

No	平面形		断面形態	検出面規模 長軸×短軸×深さ	底面規模 長軸×短軸	底面ピット 数	底面ピット 直径×深さ	備考
	検出面	底面						
1	長 方	長 方	垂直	112×61-103	93×50	1	28-34	
2	楕 円	楕 円	垂直	80×64-125	59×48	2	12-23・10-8	
3	長 方	長 方	垂直	129×94-119	101×51	1	12-7	
4	円	長 方?	すはまり	102×92- 91	62×51	2	7-10・5-10	杭穴を黄灰色砂質土で詰める
5	長 方	長 方	垂直	117×70- 84	89×45	4	6-25・6-19・5-17・5-9	2穴間を黄灰色砂質土で詰める
6	楕 円	楕 円	垂直	106×87-125	83×78	0		各穴を黄灰色砂質土で詰める
7	楕 円	楕 円	垂直	72×67- 82	51×39	0		

土壤一覧表

(cm)

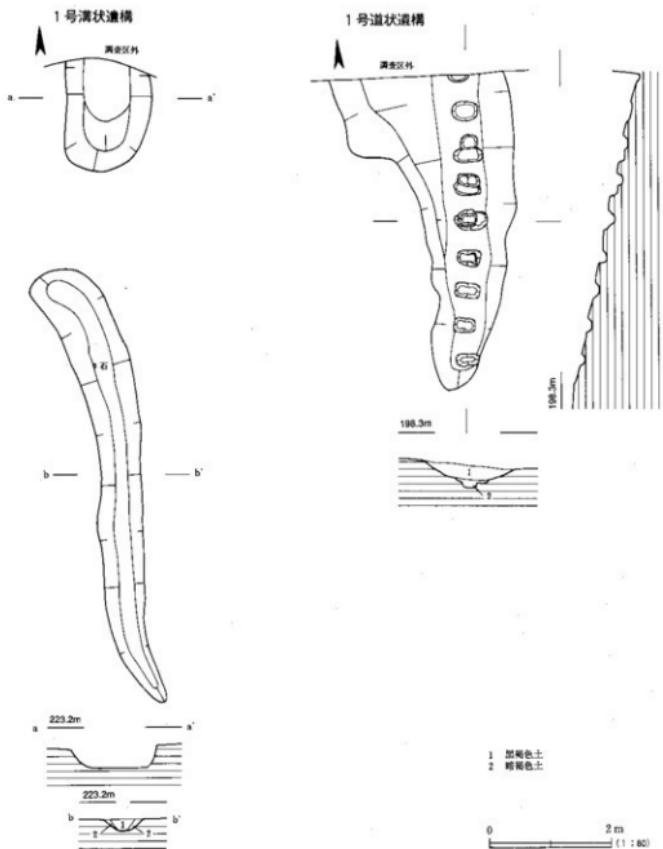
No	平面形	検出面規模 長軸×短軸×深さ	備 考	No	平面形	検出面規模 長軸×短軸×深さ	備 考
1	楕 円	82× 74-17	炭化物 (720±70 y.B.P.)	11	円	74× 70-18	炭化物 (1080±60 y.B.P.)
2	楕 円	65× 62-16	炭化物 (1200±90 y.B.P.)	12	楕 円	72× 63-22	炭化物
3	円	233×216-27	炭化物多量	13	長 方	115× 68-13	石、炭化物 (1050±70 y.B.P.)
4	楕 円	78× 65-13	炭化物	14	円	136×114-15	繩文土器片、石
5	円	159×156-29	底に焼土面				炭化物 (400±80 y.B.P.)
6	楕 円	144×107-22	炭化物多量 (2310±70 y.B.P.)	15	楕 円	168×117-31	14号を切る
7	円	93× 87-22	炭化物多量 (1060±70 y.B.P.)	16	円	74× 68-10	焼土、炭化物
8	円	109×100-30	炭化物 (1910±70 y.B.P.)	17	不整円	163×150-18	炭化物
9	円	101× 87-29	炭化物 (610±70 y.B.P.)	18	楕 円	145×127-22	焼土面、炭化物
10	円	246×242-30	焼土面、炭化物多量	19	円	68× 65-12	

土壤は、調査区西側の尾根筋と、東側の尾根筋からやや南に下った緩斜面で確認した。7基の土壤のうち5基から炭化物が出土した。13号・14号土壤から出土した炭化物は、¹⁴C年代測定を行った。土壤の平面形は13号土壤が長方形であるのみで、その他は、円・楕円・不整円である。規模は直径約60~160cmで、深さは13~31cmと浅い。

13号土壤 平面形は長方形である。埋土中から多量に炭化物が出土した。¹⁴C年代測定は (1050±70 y.B.P.) であった。

14号土壤 土壤は断面観察により、15号土壤に切られる。穴の西半分より、弧を描く様に10~60cm大の角張った礫が並ぶ。前年に行った予備調査で14号土壤の遺構検出面から上層において、角張った礫を10個余り確認している。遺物は、土壤の埋土中から繩文土器片が1片出土している。埋土中から出土した炭化物の¹⁴C年代測定は、(400±70 y.B.P.) であった。

16号~18号土壤 調査区東側南斜面に所在する。埋土中から炭化物が多量に出土した。16号・18号土壤底面に焼土面があった。18号土壤の埋土中から土師質土器片36が出土した。土器は大日寺遺跡群^{II}と同類と考えられる。

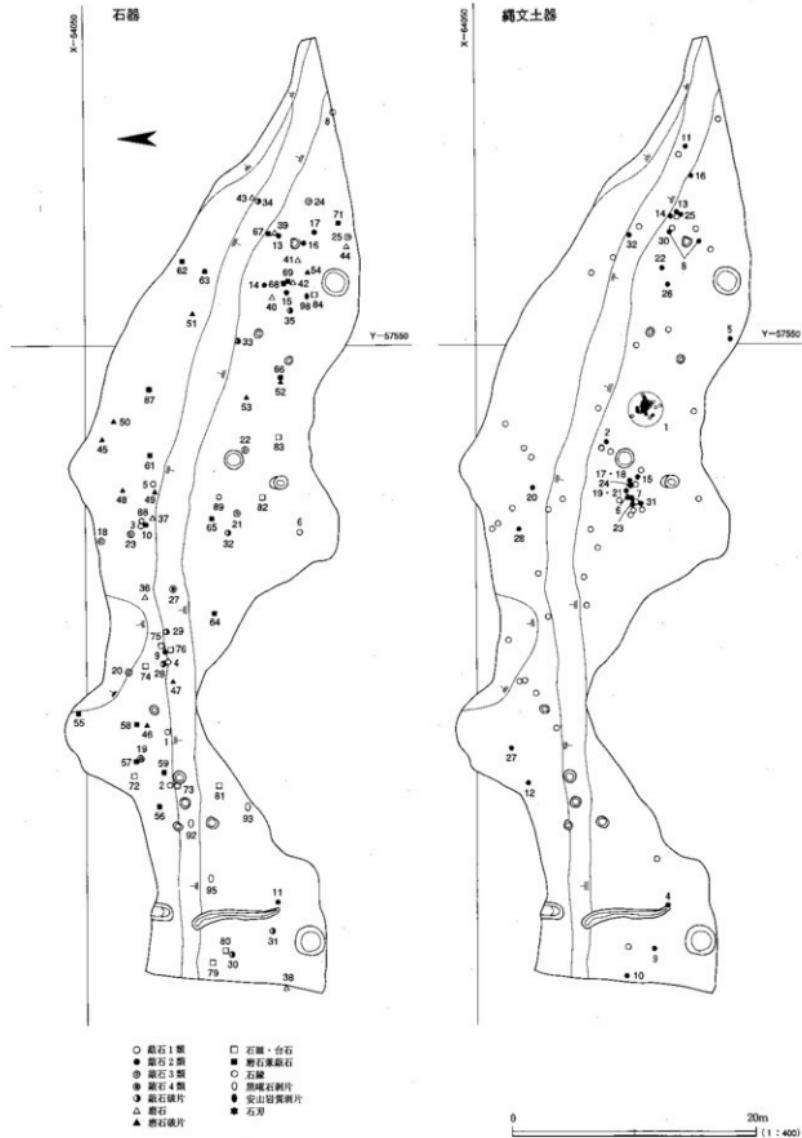


第8図 1号溝状遺構・1号道状遺構遺構図

1号道状遺構 調査区中央北側に南北方向に所在する。溝の断面は開いたV字状で、底は幅約75cmの平坦面がある。底面は長さ約40×幅25cmの窪みが約60cm間隔で9カ所並ぶ。窪みは、赤くなっている部分があり、現地の肉眼観察では鉄分が付着している様に見えた。北から南へ高くなっており、その傾斜角は12°である。調査区外には1号道状遺構に連続して、地道が確認できる。したがって、1号道状遺構は道である。

註

- (1) 竹中孝浩 「中尾遺跡発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1992
- (2) 森下哲哉 「大日寺遺跡群発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1993



第9図 1区遺物出土位置図

2 遺物

縄文土器

調査によって出土した縄文土器は、小片も含め約150点検出された。このうち1区では約120点、2区では30点であった。出土した縄文土器のうち遺構に伴うものは、1区5号土壤の小片および2区の14号土壤に伴う小片だけであり、他はすべて遺構検出面からである。第9図1区遺物出土位置図(縄文土器)参照。このような出土状況の縄文土器であるため、層位的に明確な区分は不可能であった。このため報告では型式的特徴と文様による特徴の観察で分類整理した。出土した縄文土器の時期は、縄文時代前期・中期・晩期の3時期に大きく区分することができる。またその文様や形態から、条痕文土器・縄文土器・黒色研磨土器、そして粗製土器などの分類が可能であった。各地区の出土状況は、1区ではその大半が調査区東側で、旧地道の南側に集中する。集中箇所は3箇所存在し、東寄り部分、やや中央寄り部分、そして縄文土器(1)が出土する部分である。2区の遺物出土状況は、角礫が弓なりに並ぶ14号土壤周辺だけである。

ここでは、各地区的出土位置ごとに、各時期の土器を大まかな分類で報告する。

1区

1 深鉢。調査区東側、2つの大きな縄文土器集中区に挟まるように破片がかたまって出土した。キャリバー状の口縁を有し、口縁部平面形が角の丸まった方形を呈する鉢形土器。口縁端上面に刻みを巡らせ、キャリバー状口縁部に竹管による沈線文と押し引き状の連続刺突文が数条ずつ交互に5段にわたり施される。胴部くびれ部には竹管による波状の押し引きと連続刺突文を施す。また胴部中央には沈線文の工具で「△」状に線を施す。文様構成から船元Ⅲ式土器に比定できる。口径約30cm、最大胴径約25cm。

2 深鉢。調査区東側、やや中央寄りの縄文土器集中部分から出土した。胴部上半が内側にくびれる鉢形土器で、キャリバー状の口縁に近く4つの波頭を有する波状口縁を呈する。口縁端上面に爪形的な刻み目を巡らし、全面に斜位あるいは縦位方向の縄文を施す。また口縁内面に縄文帶を有する土器である。縄文は単節のR L。器形や文様構成から船元Ⅰ式に比定が可能である。口径約27cm。

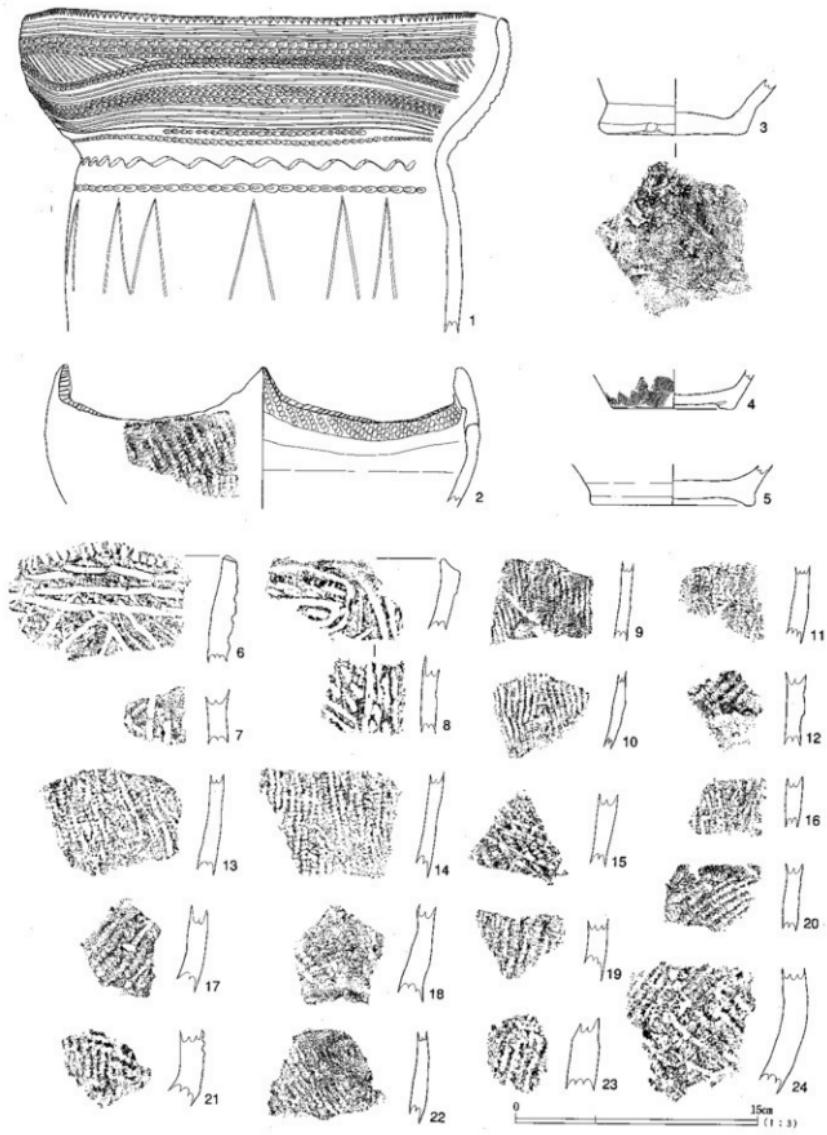
9・10 調査区西側隅の南側斜面で出土した。いずれも全面に縦位や斜位方向の縄文を施す破片。縄文は単節のR L。器形は小片のため不明であるが深鉢と思われる。

12・27 調査区やや西側寄りの旧地道の北側斜面で出土した。12は全面に粗い斜位方向の縄文が施文される。縄文は単節のL Rを施文する。27は縦位方向の浅い条痕文を施す。いずれも器形は小片のため不明であるが深鉢と思われる。

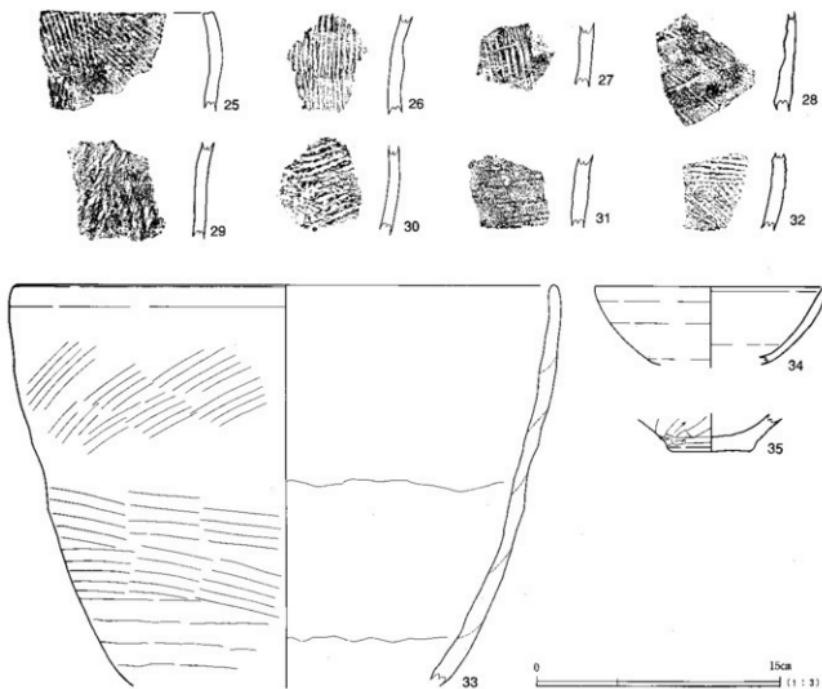
20・28 調査区ほぼ中央部、旧地道の北側で出土した。20は全面に斜位方向に単節の縄文L Rを施文する。28は斜位方向の浅い条痕文を施す。いずれも器形は小片のため不明であるが深鉢と思われる。

8・11・13・14・16・22・25・26・30・32 調査区東側で旧地道から南側の丘陵尾根部に集中して出土した。8はやや内湾気味の口縁を有する鉢形土器。地文に縄文を施し、太く、荒っぽい沈線を施す。沈線には渦巻文も見られる。地文の縄文は単節のR L。11・13・14・16・22の5片は全面に間隔の粗い縦位から斜位の縄文を施す。撚りの太さの違いがあるものの施文される縄文はいずれも単節のR Lと思われる。25・26・32の3片は、太さ1.5mm前後の単節のL Rの縄文を縦位や斜位方向に施文する。施文される縄文の間隔が広い。25は内湾気味に立ち上がる口縁部で、口縁端面はナデて平面を呈する。わずかにキャリバー状の鉢形土器と思われる。30は全面に斜位方向の撚糸文を施す。器形は口縁部片の25を除きいずれも小片のため不明であるが深鉢の破片と思われる。

この内8については、太く粗い沈線や地文の縄文から船元式土器あるいは里木式土器に比定できる。



第10図 桶文土器遺物図 1



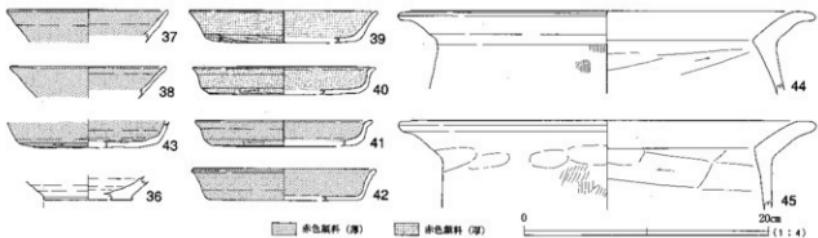
第11図 繩文土器遺物図 2

6・7・15・17~19・21・23・24・29・31 調査区東側、やや中央寄りの土器集中区から出土する。この内6・7はやや内湾気味の口縁を有する鉢形土器。地文に縄文を配し、太くやや荒っぽい沈線で縄文や曲線文あるいは直線文を描く。地文の縄文は単節R Lである。22は縄文地に竹管による押し引き沈線が施される。地文の縄文は単節のR Lと思われる。17・19・21・23の4片は、いずれも全面に縄文を施す土器である。縄文は撚りの太さの違いがあるものの、施文される縄文はいずれも単節のR Lと思われる。24は、小片で全体がわからないが施文の状況から羽状縄文の可能性がある。29はやや赤みのある胎土を有する土器で、器面には無筋のRの縄文を施す。31は、全体に条痕文を施す。いずれも小片の土器であり器形は不明であるが、深鉢の破片と思われる。この内6・7の土器は、その太くて荒い沈線文から船元式土器に比定できる。

3~5 底部の破片である。3は五角形を呈し、底径約9cmを測る。平底で、網代底の痕跡を認めるが明確ではない。4・5は上げ底の底部で底径は約7cm、10cmを測る。4は外面に縄文を施す。

2区

33 深鉢。調査区西側に所在する14号土壤北側周辺で出土した。やや大型の粗製の鉢形土器。内外面とも粗い条痕文を施す。口径約33cm。



第12図 土師器・土師質土器遺物図

(括弧()は測定値)

出土位置	No.	器種	法徴 (m)	形 態	手 法	胎土 構成 色調 保存度							
2区 18号土塗	36	土師質 底鉢	底径 (7.2)	口縁部は直線的に外方に立ち上る。	口縁部内外面ヨコナデ。底部ホリ切り。	茶色粒子多量に含む。焼成普通。洪積白黄褐色。底部1/10、口縁部わずかに遺存。							
2区	37	土師器 杯	口径 (14.0)	口縁部はほぼ直線的に外方に立ち上る。 38は器底溝の、39の同一部と思われる底 部破片内面に異物が付着しているため、 灯明皿と推定される。	口縁部内外面ヨコナデ。	胎土やや粗い。1m以下の砂粒比較的多く含む。焼成普通。淡白褐色。内外面赤色顔料地彩。口縁部1/5遺存。							
	38		口径 (12.6)										
	39	土師器 皿	口径 (15.2) 器高 2.7	口縁部が明瞭に立ち上がる斜と深手の皿。 やや内面気味に立ち上がる器底が内側に削 り落され、内側した面を持ちやすが低いもの (40・41) と、外反気味に立ち上がる 器高の高いもの (39・42) がある。両方 とも底盤は平坦。43は皿の底盤と考えられ、 底盤の凸を残す。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外側の調整は 39は多方向のハラケジ、40・43はへり切 りナデで仕上げる。40・42は底面が平滑 になるまで丁寧にナデ調整が施されるが、 43はわずかにへり切りの段を残す。 39・40はやや顔料が厚く、色が濃い。	胎土精良。茶色粒子含む。焼成良好。淡白褐色。 内外面赤色顔料地彩。口縁部～底部1/5遺存。							
	40		口径 (14.7) 器高 2.2			胎土精良。焼成良好。茶色顔料地彩。口縁部～底部1/10遺存。							
	41		口径 (14.3) 器高 2.2			胎土精良。0.5mm以下の砂粒わずかに含む。燒 成良好。淡黃褐色。内外面赤色顔料地彩。口縫部 ～底部1/10遺存。							
	42		口径 (14.9) 器高 2.6			胎土精良。器面削ぎ。焼成やや良いまい。赤褐色。 内外面赤色顔料地彩。口縫部～底部1/3遺存。							
	43												
	44	土師器 蓋	口径 (31.2)	口縁部は外反気味に外へ開く。邊縁はさら に外へ延び、上翼に蓋を持つ。	裏部外側44はT具を使ったナゲ、45はオ サニの接縫。体縫外側ハケメ後ナゲ。	胎土粗い。1～3mmの大砂粒を多量に含む。 焼成良好。橙褐色。口縫部1/10遺存。							
	45		口径 (31.5)			2mm以下の砂粒比較的多く含む。焼成普通。 淡褐黄褐色。口縫部1/5遺存。							

34 鉢。14号土塗覆土やその周辺で出土した。外面良好研磨された精製土器である。外面使用による煤の付着が認められやや黒ずむ。口径14.2cm。

35 14号土塗の北側で出土した。小型の鉢の底部と思われ、削り出しの高台状の高まりを有する。外面は放射状に削りが認められる。底径 4.8cm。

土師器・土師質土器

土師器は造構に伴うものが無く、2区の黒褐色土（クロボク）中で杯・皿・壺が出土した。詳細については観察表に一括した。杯・皿にはいずれも赤色顔料が塗彩され、その中で顔料の厚薄の差が認められたがどちらも茶色味をおびた色であり、調整方法なども伯耆国第2段階の特徴を持つ。

土師質土器は2区18号土塗埋土中で1片出土した。土器は大日寺遺跡群・杯IIの特徴を持つ。

石器

石器は1・2区合わせて91点出土した。2区での出土は2点(S85・86)のみで、ほとんどが1区からの出土だった。

石材は肉眼観察によって分類した。87点(96%)が角閃石安山岩で、そのうち23点(26%)が黒雲母角閃石安山岩であった。その他花崗岩2点(2%)、凝灰角礫岩1点(1%)、黒曜石1点(1%)であった。これらの石は黒曜石の1点を除き、大山東麓で産出する石で、遺跡周辺から採取したとみられる。黒曜石は未鑑定であるが、近くでは島根県隱岐島で産出する。

石器の顕著な集中場所はないが、1区東側尾根筋の1号土壙付近、1区中央や東寄り、1区西寄り7号～9号、11号、12号土壙付近にやや分布密度が高い部分がある。石器の種別による分布は特に傾向が認められない。

敲石 石の表面に敲打痕のあるものを敲石とした。出土点数は35点である。敲石は使用痕の場所によって4種類に分類した。平均重量は348gである。破片で分類不能な石は除外した。平均重量については完存するものについて取り扱った。

1類一石の平坦面のうち、1面のみに敲打痕のあるもの。8点出土している。平均重量は417.3gである。

2類一石の平坦面のうち、2面に敲打痕のあるもの。9点出土している。平均重量は270.5gである。S16はすべての石器中唯一、凝灰角礫岩を使用する。

3類一石の平坦面と周縁部に敲打痕のあるもの。9点出土している。このうち3点は角張った礫を使用する。平均重量は、381.3gである。

4類一石の周縁部のみに敲打痕があるもの。1点のみ出土した。重さは148gである。

磨石 石の表面に磨耗痕のあるものを磨石とした。出土点数は19点である。平均重量は819.8gである。破片を除外した9点は、丸い礫6点と、角張った礫3点がある。角張った礫は磨り面が平坦になっている。角張った礫のうちS44は線状の擦痕がある。

磨石兼敲石 石の表面に敲打痕と磨耗痕のあるものを磨石兼敲石とした。出土点数は17点である。平均重量は498gである。磨りと敲きが平坦面と周縁部に組合わさせてバラエティーに富んでいる。S60は2条の溝が平行に凹む。

石皿・台石 磨り面があり、磨石(上石)とセットで下石となるとみられるものを石皿・台石とした。破片については、ある程度の大きさが推定できるものについてのみ石皿・台石として取扱い、それ以外は磨石とした。出土点数は15点である。平均重量は、破片を含め2,523gである。磨り面が凹むものはS74・S79のみでその他は平坦になっている。

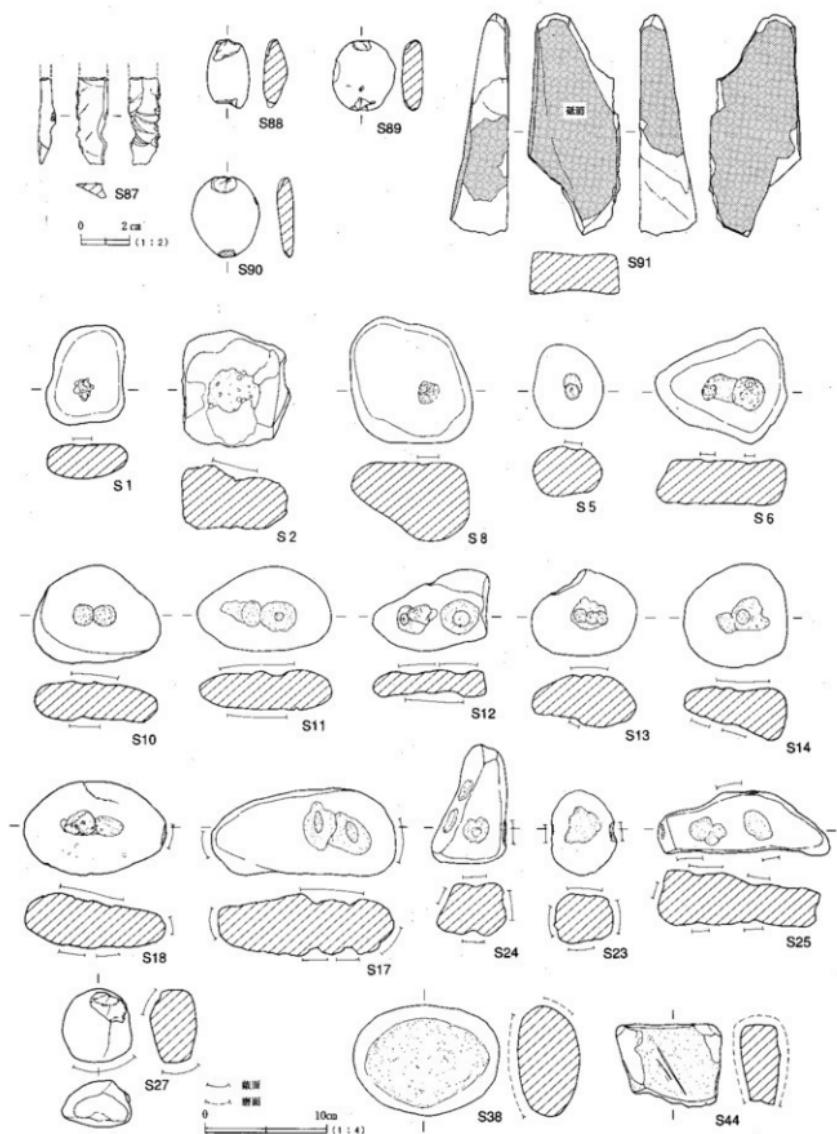
石錐 3点出土した。橢円形の偏平な石を長軸方向から打ち欠く。

砥石 1点出土した。四面に砥面がある。石材は花崗岩である。

石刃 1点出土した。上部欠損。石材は黒曜石。上部欠損により打点形状は不明である。左側縁部に主に背面側からの不連続なリタッヂが認められる。

その他 安山岩質剥片、黒曜石剥片が各4点出土した。分布にまとまりは無かった。

註 調査忠彦・茂子 「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7集 倉敷考古館 1971

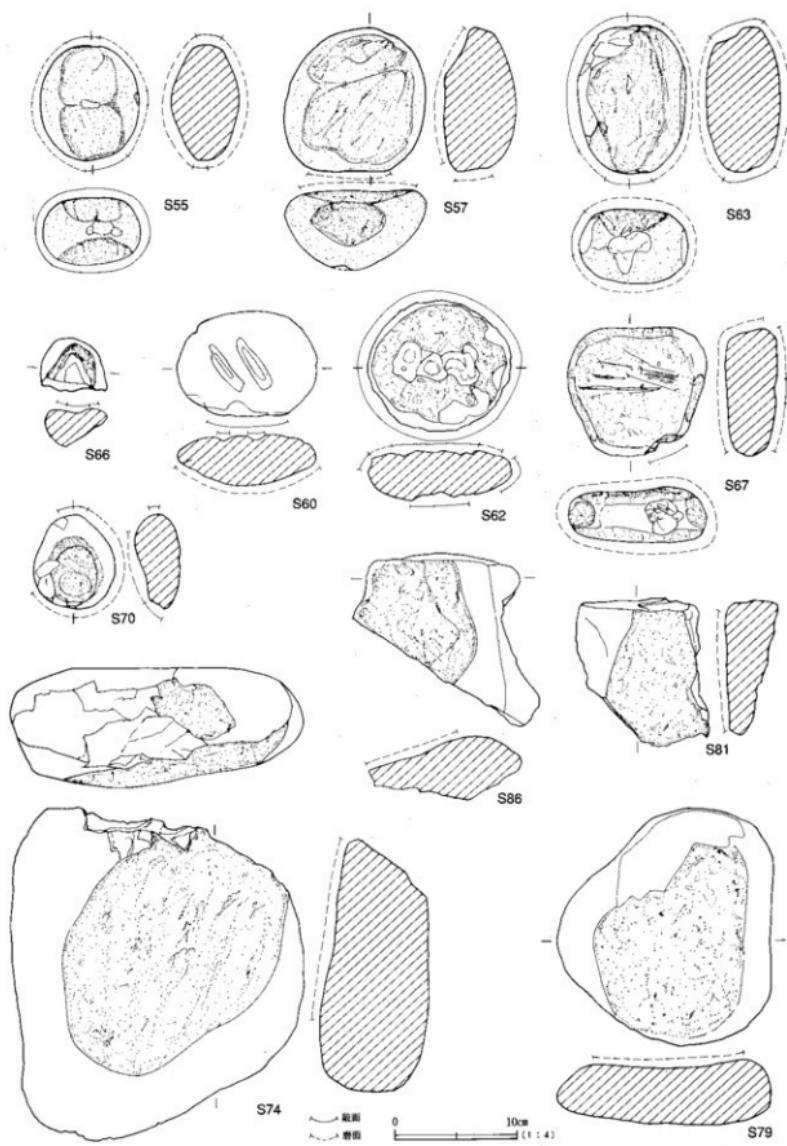


第13図 敷石・磨石・石錐・砥石・石刃遺物図

石製品一覧表

(cm・g: ()は遺存値、頁の()は復元)

種類	No.	頁	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	遺存	備 考
縞石	S 1	19	8.2	6.4	2.8	202	角閃石安山岩	完存	平坦面の片面に凹み 1カ所。
	S 2	19・(3)	9.7	8.8	5.3	484	角閃石安山岩	ほぼ完存	平坦面の片面に凹み 1カ所。
	S 3	10.0	7.3	6.3	4.4	444	黒雲母角閃石安山岩	完存	平坦面の片面に凹み 1カ所。
	S 4	9.3	6.3	5.8	38	角閃石安山岩	完存	平坦面の片面に凹み 1カ所。	
	S 5	19	6.9	5.7	4.1	162	黒雲母角閃石安山岩	完存	平坦面の片面に凹み 1カ所。
	S 6	19・(3)	10.8	9.6	3.7	428	角閃石安山岩	完存	平坦面の片面に凹み 2カ所。
	S 7	10.3	9.8	5.2	36	黒雲母角閃石安山岩	完存	平坦面の片面に凹み 1カ所。	
	S 8	19	10.4	10.0	6.5	855	角閃石安山岩	完存	平坦面の片面に凹み 1カ所。
2期	S 9	7.5	6.1	(4.8)	(174)	角閃石安山岩	3／4 遺存	断面三角形。1面に凹み 1カ所。1面に凹み 3カ所。	
	S 10	19・(3)	10.4	8.1	3.3	336	角閃石安山岩	完存	平坦面の片面に凹み 1カ所。もう1片面に 2カ所。
	S 11	19・(3)	11.0	7.0	3.3	344	角閃石安山岩	ほぼ完存	平坦面の片面に 2カ所ずつ、計 4カ所凹み。
	S 12	19・(3)	8.5	6.7	2.2	158	角閃石安山岩	完存	平坦面の片面に 2カ所ずつ、計 4カ所凹み。
	S 13	19	8.6	7.0	4.2	268	黒雲母角閃石安山岩	完存	平坦面の片面に凹み 1カ所。もう1片面に 3カ所。
	S 14	19	8.5	8.4	4.3	29	角閃石安山岩	完存	平坦面の片面に 2カ所ずつ、計 4カ所凹み。
	S 15	9.8	7.4	4.4	346	角閃石安山岩	ほぼ完存	平坦面の片面に 1カ所ずつ、計 2カ所凹み。	
	S 16	10.3	7.8	6.1	240	断続角礫岩	完存	平坦面の片面に 1カ所ずつ、計 2カ所凹み。	
3期	S 17	19	7.9	5.9	4.4	180	黒雲母角閃石安山岩	完存	平坦面の片面に 1カ所ずつ、計 2カ所凹み。
	S 18	19・(3)	11.6	7.7	4.5	450	角閃石安山岩	完存	平坦面の片面に 2カ所ずつ、計 4カ所凹み。周縁部に敲打痕 1カ所。
	S 19	(9.9)	(6.5)	7.4	(444)	角閃石安山岩	ほぼ完存	平坦面の片面に 1カ所ずつ、計 2カ所凹み。周縁部に敲打痕 1カ所。	
	S 20	12.8	8.3	4.4	620	角閃石安山岩	完存	平坦面の片面に 2カ所、周縁部に 1カ所凹み。	
	S 21	(3)	10.1	7.2	4.1	720	角閃石安山岩	完存	平坦面の片面に 2カ所ずつ、計 4カ所凹み。上下に敲打痕。
	S 22	7.4	5.2	3.5	156	角閃石安山岩	完存	平坦面の片面に 1カ所ずつ、計 2カ所凹み。上下左右に敲打痕 4カ所。	
	S 23	19	6.9	5.2	4.1	160	角閃石安山岩	完存	平坦面の片面に 1カ所ずつ、計 2カ所凹み。周縁部に敲打痕 2カ所。
	S 24	19・(3)	9.8	6.1	4.3	268	角閃石安山岩	完存	平坦面に凹み 6カ所。尖張った縁。
4期	S 25	19・(3)	13.9	5.2	4.6	404	角閃石安山岩	完存	平坦面に凹み 9カ所。尖張った縁。
	S 26	7.4	5.8	5.7	272	黒雲母角閃石安山岩	完存	平坦面に凹み 4カ所。角張った縁。	
	S 27	19・(3)	6.1	5.7	3.8	148	黒雲母角閃石安山岩	完存	周縁部上下に敲打痕。
	S 28	(9.3)	(7.2)	(5.7)	(498)	角閃石安山岩	欠損	平坦面の片面に凹み 2カ所。火をうける？	
	S 29	(6.4)	(6.2)	(3.9)	(152)	黒雲母角閃石安山岩	欠損	平坦面の片面に凹み 1カ所。	
	S 30	(4.9)	(4.6)	(3.2)	(120)	黒雲母角閃石安山岩	欠損	平坦面の片面に凹み 2カ所。	
	S 31	(7.7)	(6.4)	(4.3)	(152)	黒雲母角閃石安山岩	欠損	平坦面の片面に凹み 1カ所。火をうける？一部赤く変化。	
	S 32	(6.6)	(6.2)	(2.4)	(164)	黒雲母角閃石安山岩	欠損	平坦面の片面に凹み 1カ所。	
5期	S 33	(10.2)	(6.8)	(2.4)	(166)	黒雲母角閃石安山岩	欠損	平坦面の片面に凹み 4カ所。	
	S 34	(9.2)	(7.2)	(3.7)	(238)	角閃石安山岩	欠損	平坦面の片面に凹み 1カ所。	
	S 35	9.5	8.9	(2.6)	(262)	角閃石安山岩	1／2 遺存	平坦面の片面に凹み 1カ所。	
	S 36	9.8	9.7	8.2	540	黒雲母角閃石安山岩	完存	平坦面の片面磨り。	
	S 37	10.8	9.7	6.7	80	角閃石安山岩	完存	平坦面両面磨り。	
	S 38	19・(3)	12.0	9.0	5.1	795	花崗岩	完存	断面三角形で 2面磨り。
	S 39	12.4	11.9	5.1	100	角閃石安山岩	完存	平坦面の片面磨り。	
	S 40	15.0	10.8	6.8	960	角閃石安山岩	完存	断面三角形で 2面磨り。	
6期	S 41	(6.4)	(4.2)	(4.8)	(168)	角閃石安山岩	1／3 遺存	平坦面の片面 2カ所に側面磨り。	
	S 42	(6.1)	(4.8)	(3.5)	(118)	角閃石安山岩	欠損	平坦面側面磨り。	
	S 43	(9.7)	6.7	3.3	(352)	角閃石安山岩	ほぼ完存	平坦面側面磨り。	
	S 44	19・(3)	(6.8)	8.7	3.3	(262)	角閃石安山岩	欠損	平坦面側面磨り。寄り面に擦痕。
	S 45	(8.5)	(3.9)	(2.6)	(86)	角閃石安山岩	欠損	寄り面が凹む。	
	S 46	(7.2)	(6.7)	(4.6)	(232)	角閃石安山岩	2／3 遺存	平坦面の片面に磨り。	
	S 47	(12.4)	(8.0)	(4.4)	(332)	角閃石安山岩	1／2 遺存	平坦面の片面に磨り。	
	S 48	(6.5)	(4.5)	4.5	(210)	角閃石安山岩	欠損	平坦面の片面に磨り。	
7期	S 49	(7.2)	(3.3)	(3.8)	(106)	角閃石安山岩	欠損		
	S 50	(4.7)	(5.2)	(4.8)	(170)	黒雲母角閃石安山岩	欠損		



第14図 磨石兼敲石、石皿・台石遺物図

(cm・g: () は遺存値、質の記号は図版号)

種類	No	質	長さ	幅	厚さ	重量	石材	遺存	備考
磨石 破片	S51		(7.1)	(6.4)	(1.3)	(73)	角閃石安山岩	欠損	
	S52		(13.9)	(12.3)	(4.3)	(745)	角閃石安山岩	欠損	
	S53		(9.2)	(6.6)	(4.6)	(236)	角閃石安山岩	欠損	
	S54		(10.3)	(5.1)	(3.8)	(166)	角閃石安山岩	欠損	一部に磨り面。
磨石象嵌石	S55	20	9.5	8.0	5.5	580	角閃石安山岩	完存	平坦面両面、周縁部磨り。周縁部3カ所、平坦面片面に敲打痕。
	S56		10.1	7.8	4.0	286	角閃石安山岩	完存	平坦面両面磨り。周縁部に敲打痕。
	S57	20	11.9	11.5	6.5	1110	角閃石安山岩	完存	平坦面の片面磨り。周縁部に敲打痕。
	S58		7.1	5.6	3.1	140	黒雲母角閃石安山岩	ほぼ完存	平坦面両面磨り。周縁部に敲打痕。
	S59		10.1	9.6	3.1	422	角閃石安山岩	完存	平坦面の片面磨り。もう片面に織り目。周縁部に敲打痕。
	S60 20-③		11.4	8.7	4.1	472	黒雲母角閃石安山岩	ほぼ完存	平坦面の片面全面磨り。もう片面に2条の溝が平行に沿る。周縁部に敲打痕。
	S61		10.1	8.6	4.5	442	黒雲母角閃石安山岩	完存	軽質。平坦面の片面全面磨り、1カ所凹み。もう片面1カ所凹み。周縁部に織打痕。
	S62 20-③		11.7	10.8	4.7	640	角閃石安山岩	完存	平坦面の片面全面磨り。両面3カ所ずつ、計6カ所凹み。
	S63 20-③		12.2	8.9	6.1	935	角閃石安山岩	完存	平坦面両面磨り。周縁部はほぼ全面磨き。
石皿・台石	S64		8.3	5.7	4.7	260	黒雲母角閃石安山岩	完存	平坦面の片面磨り。周縁部に敲打痕。
	S65		(6.9)	(5.4)	(3.4)	(114)	角閃石安山岩	1/3欠損	平坦面の片面磨りによる凹み。先端部に敲打痕。
	S66	20	(4.4)	(5.4)	(3.1)	(60)	角閃石安山岩	1/3薄存	平坦面の片面磨り裏面の中央に敲打痕。
	S67 20-③		11.4	10.6	4.6	580	角閃石安山岩	完存	平坦面両面、周縁部磨り。周縁部に敲打痕。もう片面に擦痕。
	S68		10.3	10.0	6.0	750	角閃石安山岩	完存	平坦面両面磨り。周縁部に敲打痕。
	S69		10.0	6.8	3.4	252	角閃石安山岩	完存	平坦面の片面全面磨り。両面2カ所ずつ、計4カ所凹み。
	S70	20	7.8	6.6	3.7	160	黒雲母角閃石安山岩	ほぼ完存	平坦面の片面磨りによって削る。周縁部の上下兼打痕。
	S71		10.6	8.2	5.1	446	角閃石安山岩	完存	平坦面両面磨り。周縁部の上下兼打痕。
	S72		9.3	8.5	9.7	(1280)	角閃石安山岩	欠損	平坦面に磨り。
	S73		(22.7)	(11.8)	10.9	(4300)	角閃石安山岩	欠損	磨りによる平坦面ができる。
石刃	S74 20-③		(27.4)	23.9	9.8	(7600)	角閃石安山岩	一部欠損	磨り面は若干凹む。ひび割れる。火を受けたか。
	S75		(20.3)	(14.6)	4.3	(1160)	黒雲母角閃石安山岩	欠損	磨りによる平坦面ができる。
	S76		(12.2)	(8.3)	7.3	(1280)	角閃石安山岩	欠損	平坦面に磨り。
	S77		(7.7)	(7.1)	7.6	(675)	角閃石安山岩	欠損	平坦面に磨り。
	S78		(5.5)	(4.9)	(7.0)	(169)	角閃石安山岩	欠損	平坦面に磨り。
	S79	20	19.4	17.6	5.9	(2100)	角閃石安山岩	完存	磨り面は若干凹む。
	S80		(17.2)	(11.8)	(4.1)	(760)	黒雲母角閃石安山岩	欠損	
	S81	20	(12.1)	(10.9)	(4.3)	(580)	角閃石安山岩	欠損	
	S82		(9.7)	(7.6)	(4.8)	(312)	黒雲母角閃石安山岩	欠損	平坦面に磨り。
	S83		(17.9)	(10.7)	9.3	(2000)	角閃石安山岩	欠損	磨りによる平坦面ができる。
石錐	S84 ④		15.1	12.8	6.6	1300	角閃石安山岩	一部欠損	磨り面に敲打痕による凹み2カ所。
	S85		(20.5)	(26.2)	12.4	(13400)	角閃石安山岩	欠損	平坦面はあるが明確な磨りはない。
	S86	20	(14.4)	(15.1)	5.3	(960)	角閃石安山岩	欠損	
砥石	S87 19-③		(3.6)	1.2	0.7	2.65	黒耀石	上部欠損	
	S88	19-③	5.6	3.4	1.9	34	角閃石安山岩	完存	
石錐	S89 19-③		5.7	5.0	1.7	65	黒雲母角閃石安山岩	完存	
	S90 19-③		6.6	5.5	1.3	65	角閃石安山岩	完存	
	S91 19-③		18.0	7.4	4.7	625	花崗岩	ほぼ完存	4面磨り。

IV 鑑 定

後口山遺跡から出土した炭化材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

後口山遺跡では、縄文時代前期～後期の土壌を中心とした遺構や遺物が検出されている。検出された土壌は、石圓い炉の可能性が指摘されているものもあるが、多くは詳細が不明である。しかし、焼土や炭化材が検出されている土壌については、土壌内で火を利用した可能性がある。

本報告では、各土壌から出土した炭化材について放射性炭素年代測定を行い、遺構の構築時期に関する資料を得る。また、これらの炭化材の樹種を明らかにし、用材および古植生に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、出土した炭化材10点（試料番号1～10）である。各試料の詳細は、結果と共に表1に記した。

2. 方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

(2) 樹種同定

木口（横断面）柵目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

炭化材の放射性炭素年代測定結果および樹種同定結果を表1に示す。年代測定結果は、 400 ± 80 y.B.P.～ 2310 ± 70 y.B.P.までで、試料間のバラツキが大きい。一方、炭化材の樹種は、2点（試料番号8・9）が、道管が認められることから広葉樹であることは判断できたものの、保存が悪く種類の同定には至らなかった。その他の炭化材は、常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属とスダジイに同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

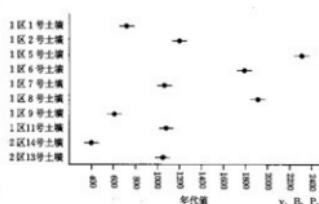
放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では梢円形、単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁

表1 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

試料番号	地区・遺構名	出土位置	樹種	年代
1	1区1号土壌	埋土	スダジイ	720 ± 70
2	1区2号土壌	埋土	スダジイ	1200 ± 90
3	1区5号土壌	底面近く	スダジイ	2310 ± 70
4	1区6号土壠	埋土	コナラ属アカガシ亜属	1790 ± 70
5	1区7号土壠	底面近く	スダジイ	1060 ± 70
6	1区8号土壠	検出面より約20cm下	スダジイ	1910 ± 70
7	1区10号土壠	埋土	スダジイ	610 ± 70
8	1区11号土壠	埋土	広葉樹（鉢孔材）	1080 ± 60
9	2区14号土壠	埋土	広葉樹	400 ± 80
10	2区13号土壠	埋土	コナラ属アカガシ亜属	1050 ± 70

注) 年代値の算出には、放射性炭素の半減期としてLIBBYの5570年を使用した。

図1 炭化材の年代測定結果の比較



孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものと複合放射組織がある。柔組織は単接線状および散在状。

- ・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1~2列。孔圈部は3~4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高。

4. 考察

(1) 遺構の構築年代

炭化材が出土した土壌は、縄文時代前期~後期の構築と考えられている。本地域の縄文時代の年代については、長谷遺跡や横谷遺跡群等で炭化材の放射性炭素年代測定を行った例がある(パリノ・サーヴェイ株式会社、1994、1996)。これらの測定値は様々で、微量な試料については無処理で測定したため、誤差があると考えられているものもあるが、概ね縄文時代の年代(キーリ・武藤、1982;日本第四紀学会ほか、1992)の範囲に含まれている。

今回の年代測定値は、400y.B.P.~2310y.B.P.まで、1000~1200y.B.P.付近に半数近く試料が集中する(図1)。また、全体的に2000y.B.P.よりも新しい試料が多く、推定年代と一致する試料は認められない。これまで測定してきた結果で、多少誤差はあっても縄文時代の範囲に収まっている試料が多いこと、1000~1200y.B.P.付近に集中する傾向があること、炭化材の多くが床面直上ではなく覆土中から出土していること等を考慮すると、遺構の構築年代が縄文時代よりも新しいか、炭化材が後世に混入した可能性が考えられる。今後、遺構の検出状況などと合わせて検討したい。

(2) 用材および古植生

炭化材は、同定できなかった2点を除く8点がアカガシ亜属とスダジイに同定された。いずれも暖温帯常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の主構成種であり、これまでの調査でも縄文時代や弥生時代の炭化材に多数認められている(パリノ・サーヴェイ株式会社、1990、1991、1992、1994、1996a、1996b、1997a、1997b)。これらの結果から、本地域では縄文時代以降、常緑広葉樹を主とした植生が見られたことが推定される。これまで出土した木材は、基本的にはこのような周辺で入手できる木材を使用したことが推定され、今回の結果もその一例といえる。

<引用文献>

- ・キーリ C. T. ・武藤康弘(1982) 縄文時代の年代 加藤晋平・小林達雄・藤本 強編「縄文文化の研究」 縄文人とその環境 p.246~275 雄山閣
- ・日本第四紀学会(1992) 小野 昭・泰成秀爾・小田静夫編「医療・日本の人類遺跡」 p.242 東京大学出版会
- ・パリノ・サーヴェイ株式会社(1990) 大仙峯遺跡1号住居出土炭化材同定について 倉吉市文化財調査報告書第60集「立籠遺跡群V 大仙峯遺跡発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会
- ・パリノ・サーヴェイ株式会社(1991) 頸根後谷遺跡住居出土の炭化材樹種同定について 倉吉市文化財調査報告書第61集「立籠遺跡群VI 頸根後谷遺跡発掘調査報告書」 付1~11 倉吉市教育委員会
- ・パリノ・サーヴェイ株式会社(1992) 炭化植物の同定と炭化材の¹⁴C年代 倉吉市文化財調査報告書第69集「中尾遺跡発掘調査報告書」 p.130~140 倉吉市教育委員会
- ・パリノ・サーヴェイ株式会社(1994) 炭化材の樹種と年代 倉吉市文化財調査報告書第76集「長谷遺跡発掘調査報告書」 p.109

- ・パリノ・サーヴェイ株式会社（1996a） 夏谷遺跡から出土した炭化材の樹種 倉吉市文化財調査報告書第84集「夏谷遺跡発掘調査報告書」 p.261-268 倉吉市教育委員会
- ・パリノ・サーヴェイ株式会社（1996b） 横谷遺跡群 炭化物鑑定報告 倉吉市文化財調査報告第86集「横谷遺跡群発掘調査報告書 別冊」 p.1-5 倉吉市教育委員会
- ・パリノ・サーヴェイ株式会社（1997a） 下張坪遺跡C地区から出土した炭化材の樹種 倉吉市文化財調査報告書第88集「下張坪遺跡発掘調査報告書」 p.113-123 倉吉市教育委員会
- ・パリノ・サーヴェイ株式会社（1997b） 両長谷遺跡から出土した炭化材・種実遺体の種類 倉吉市文化財調査報告書第89集「両長谷遺跡発掘調査報告書」 p.57-61 倉吉市教育委員会

V まとめ

後口山遺跡は、縄文時代を主とする遺跡であった。調査の結果、1区で土壙12基・溝状遺構1条、2区で落し穴7基・土壙7基・道状遺構1条を確認した。以下、各区毎に若干の考察を加えまとめとしたい。

1区

土壙 土壙は、周辺で縄文土器、石器（敲石・磨石など）が平面的にまとまって出土したことにより、調査時は単純に縄文時代の土壙であると考えていた。しかし、¹⁴C年代測定の結果は一番古い3号土壙で（2310±70y.B.P.）、最も新しい1号土壙に至っては（720±70y.B.P.）と新しかった。さらに、縄文時代と鑑定された炭が1点も無く、埋土中に縄文土器がほとんど含まれないことから、縄文時代の土壙であると積極的に肯定はできない。ただし、7号～9号・11号土壙は、同じ様な規模と立地では等間隔であるため、もし¹⁴C年代測定結果の数値が得られないままであれば、縄文時代でないにしても同じ時期に推定できるだろう。にもかかわらず、バラバラの年代だったことは、表土が薄く検出面まで約15～20cmしかないため、後世の炭が埋土中に混入したとも考えられる。このため、これら土壙が縄文時代のものではないと否定もできない。また、縄文土器と石器の分布を土壙と合わせてみると、東側の1号土壙周辺、中央の5号土壙周辺で縄文土器と石器の集中が、中央から西側7号～9号・11号・12号土壙周辺に石器の集中が認められる。このため、土壙と縄文土器・石器は一連のものである可能性がある。以上のことから、1区は木の実などを採集するキャンプ地として縄文土器の年代である中期前半頃に利用されていたものと推定される。3号・10号土壙は、直径2m以上の大きさがあり、炭化物の多量出土と焼土面があることを特徴とする。出土遺物ではなく、¹⁴C年代測定を行っていないため、造られた時期は不明である。このため遺構の性格は判然としない。

2区

落し穴 丘陵尾根筋と丘陵鞍部の若干下った斜面部分に分布している。落し穴の底面には、杭を安定させるために詰めたブロック状の黄灰色砂質土を3基で確認した。落し穴から土器、年代測定できる炭化物はまったく出土しなかった。したがって時期は不明である。

土壙 14号土壙は、¹⁴C年代測定の結果は（400±80y.B.P.）と新しかった。しかし、石が土壙の輪郭に沿って半円状に出土していること、縄文土器片が埋土中から出土したことから石窯い炉の可能性が高く、炭は後世に混入したものと推定される。石窯い炉の周辺で関連する遺構は確認できず、縄文時代晩期の土器が付近の黒褐色土中より出土したのみであった。しかし、炉だけ単独であったとは考えにくく、遺構検出面より上層の黒褐色土中に平地式住居、竪穴式住居などの遺構が存在した可能性がある。また、14号土壙自体が住居内の炉であったかもし

れない。

16号～19号土壙は、直径が約0.7～1.6m程度であるが、旧表土から遺構検出面まで黒褐色土が堆積していたことを考えると、本来の大きさはもっと大きいと考えられる。土壙には、炭化物が多量に含まれるものが2基、焼土または焼土面があるものが2基ある。これらの状況は、1区3号・10号土壙に似る。ほぼ同じ標高に緩く弧を描いて10m程度の均等な間隔を持つことから、比較的短期間に使用されたと思われる。土壙の造られた時期は、18号土壙の埋土中から土師質土器が一片出土しているのみで確定はできない。

後口山遺跡は、大日寺の後背地で大日寺関連遺構が予想されたが、2区において伯耆国⁸⁾第2段階の土師器、11世紀代の土師質土器が若干出土したのみで明確な遺構は確認できなかった。今後、大日寺遺跡群を解明するには、南側の山裾から斜面を調査していく必要がある。

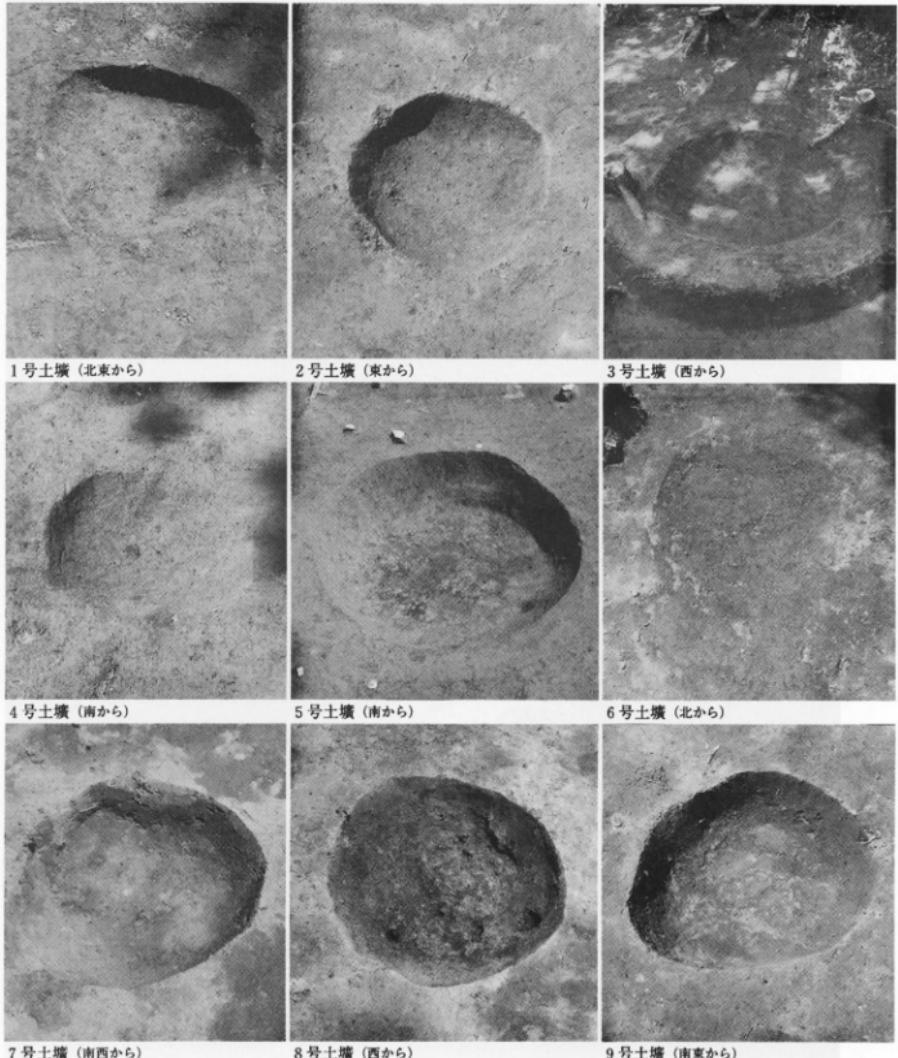
註) 岩津一郎他 『伯耆国跡発掘調査概報(第5・6次)』 倉吉市教育委員会 1979



△1区調査前全景（東から）

▽1区調査後全景（東から）

図版 2

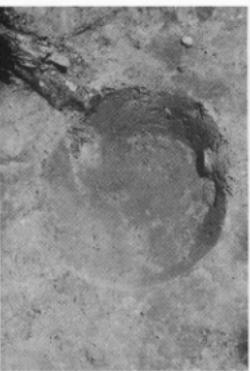


参考文献・資料収集者 藤井義典

参考文献・資料収集者 藤井義典



10号土壤（東から）



11号土壤（西から）



12号土壤（西から）

1号溝状遺構

(南から)



5号土壤西侧縄文土器出土状況

(南から)



（参考）竪穴式住居跡の

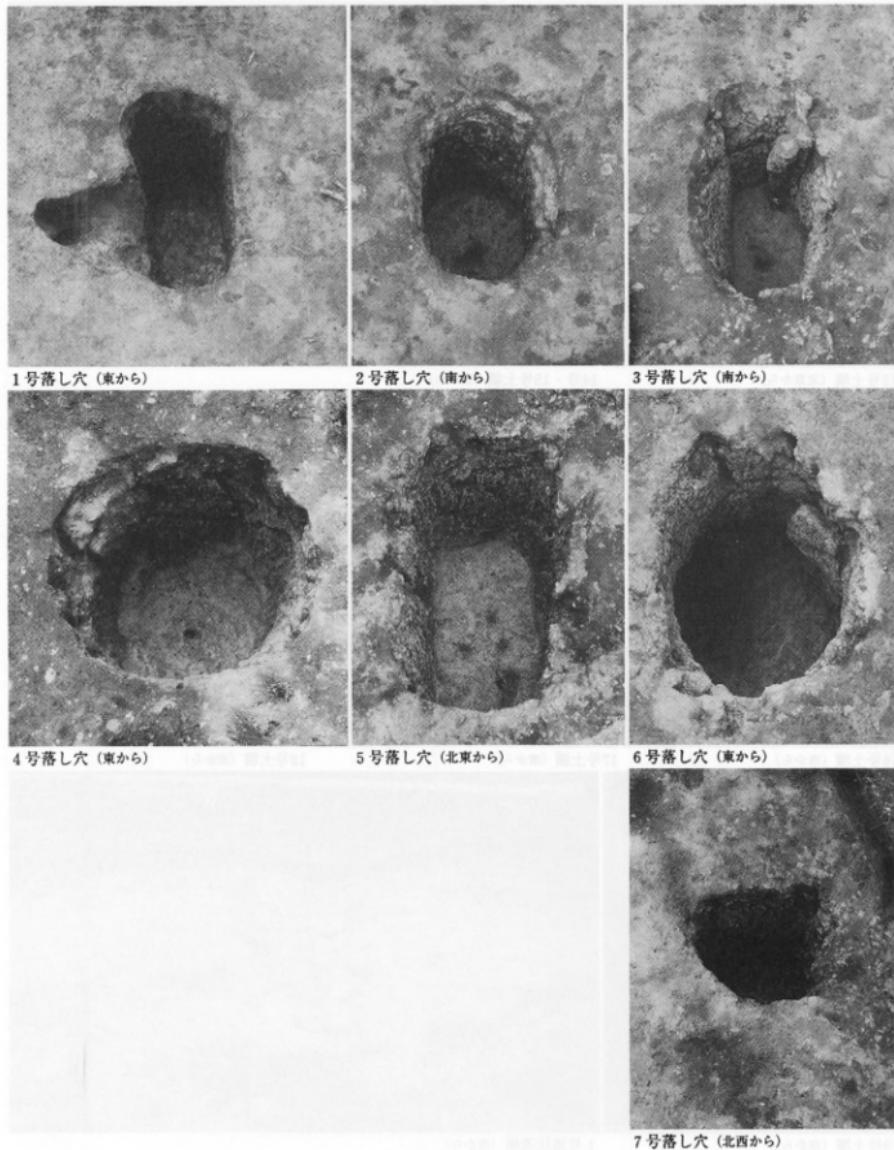
（参考）竪穴式住居跡の

図版 4

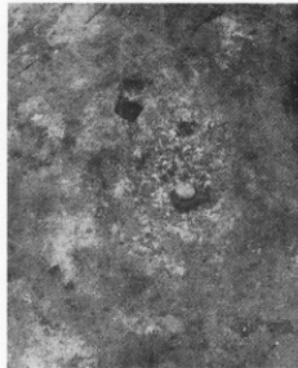


△ 2区調査前全景（東から）

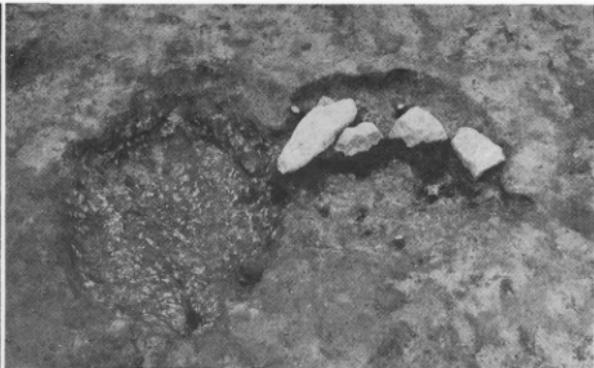
▽ 2区調査後全景（東から）



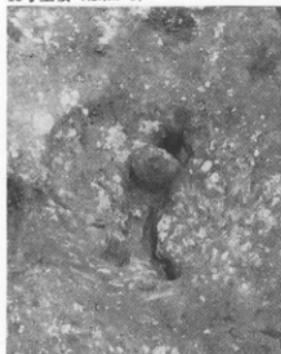
図版 6



13号土壤（北東から）



14号・15号土壤（東から）



16号土壤（西から）



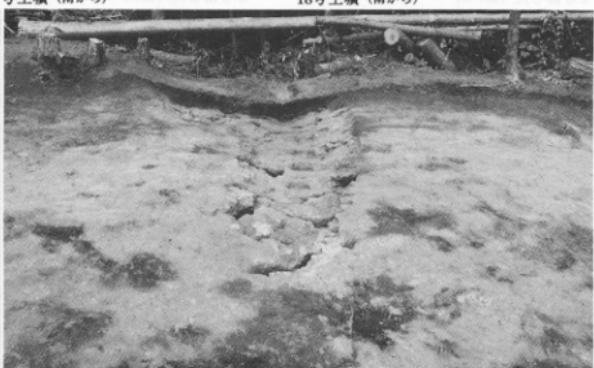
17号土壤（南から）



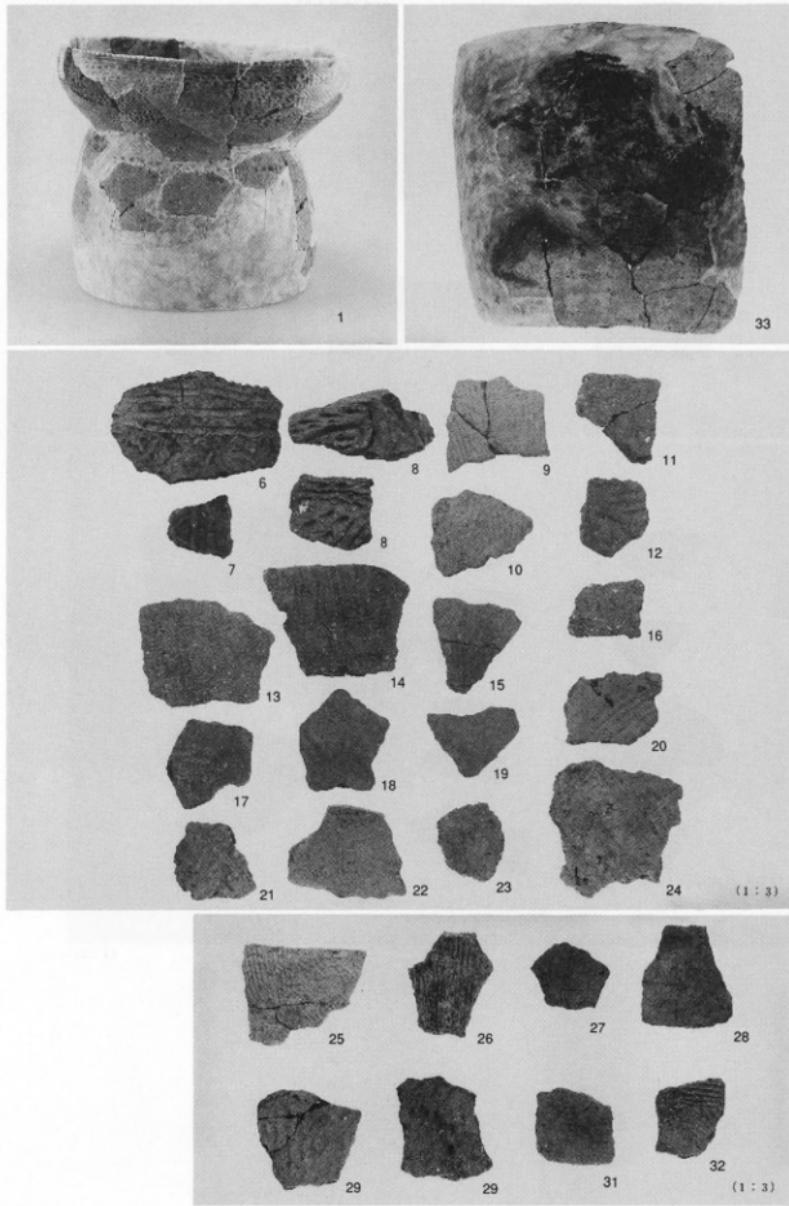
18号土壤（南から）

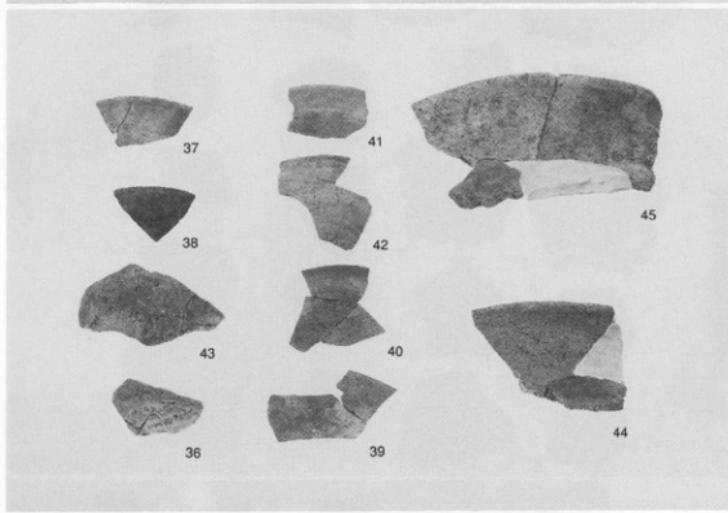
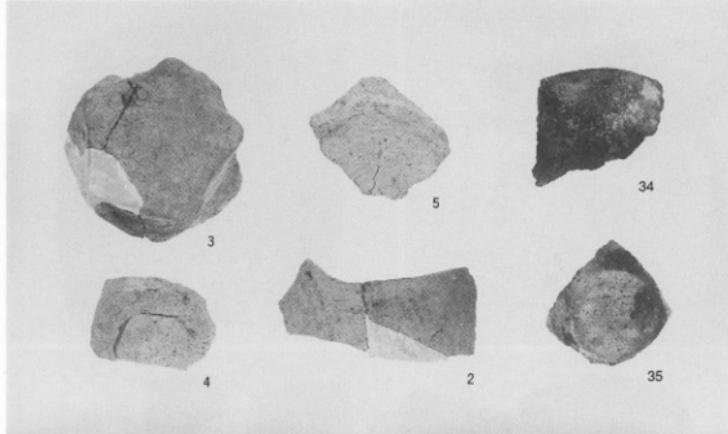


19号土壤（南から）



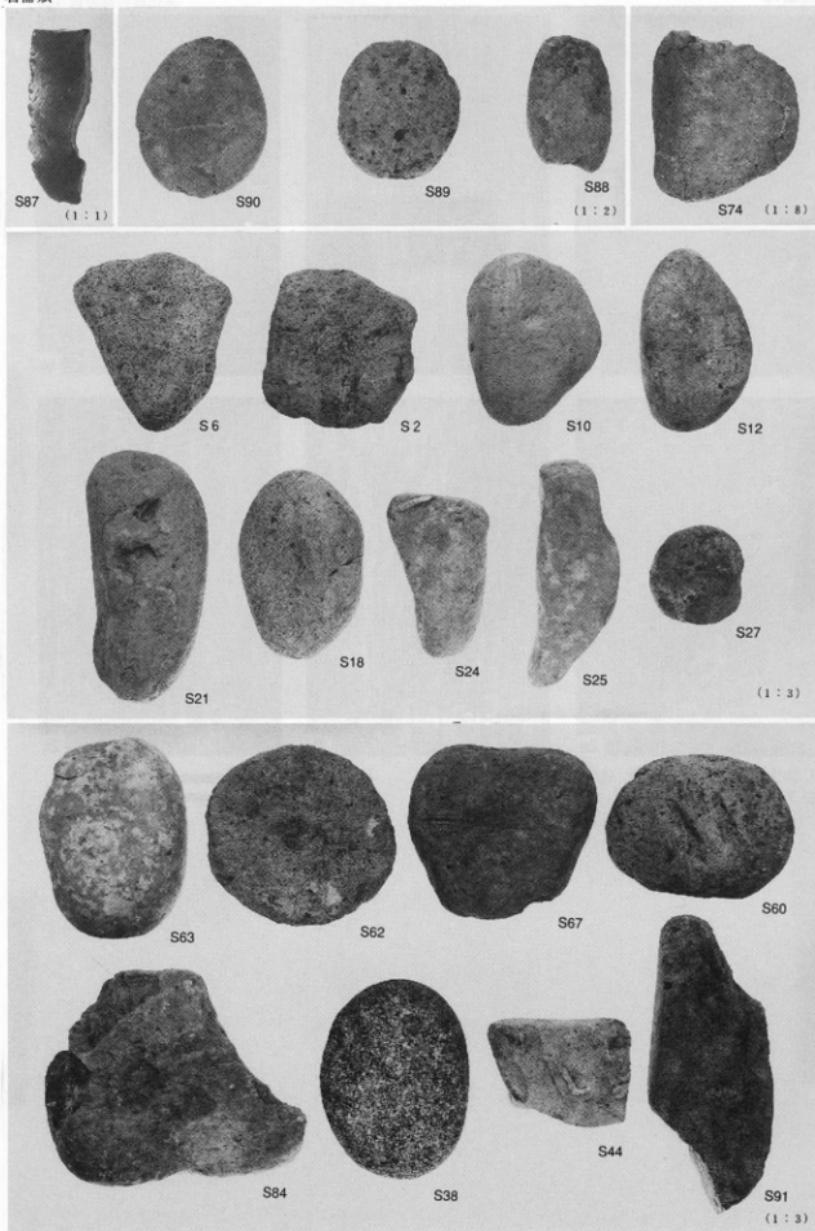
1号道状遺構（南から）





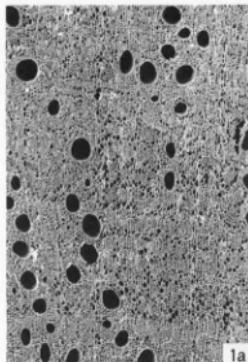
(1 : 3)

石器類



図版10

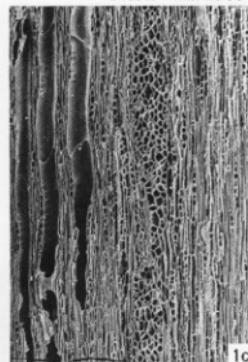
炭化材の顕微鏡写真



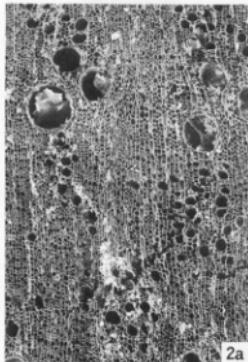
1a



1b



1c



2a



2b



2c

1. コナラ属アカガシ亜属（試料番号4）

2. スダジイ（試料番号6）

a : 木口, b : 柱目, c : 板目

— 200 μ m : a
— 200 μ m : b, c

報告書抄録

書名	後口山道路発掘調査報告書							
調書名	――							
卷次	――							
シリーズ名	金吉市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第33集							
編著者名	加藤誠司							
編集機関	金吉市教育委員会							
所在地	〒682-8611 島根県金吉市奥町722番地 TEL 0858-22-6419							
発行年月日	西暦1998年3月20日							
所収遺跡名	所在地		コード 吉町村：遺跡略号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
後口山道路	鳥取県金吉市	後口山	31203:2 O S U	1区35° 25' 15" 2区35° 25' 16"	133° 41' 56" 133° 42' 13"	1997.04.30～1997.08.28	1区 1,000m ² 2区 1,900m ²	県営東伯中央地区広域農道事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
後口山道路	土塁	縄文時代	溝し穴 7基	炭化物	1区において、遺構に伴わないので、陶石・磨石・石器などの石器が縄文土器とともに、比較的まとまって出土。			
			溝状遺構 1条					

後口山遺跡発掘調査報告書

平成10年3月20日 印刷

平成10年3月20日 発行

編集 発行 倉吉市教育委員会

印刷 製本 勝美印刷株式会社